

未来へつなごう！ 壮大な海すすきの草原

第13回

全国

草原

サミット・シンポジウム in 東伊豆

報告書

開催日

2021. 9/26回・27回

開催地

静岡県東伊豆町 稲取細野高原

主催

全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆大会実行委員会

目 次

■ 第13回全国草原サミット・シンポジウム

- 実行委員長(開催地)あいさつ 2

■ 第13回全国草原シンポジウム

◆ 基調講演

- 「草原をとりまく里が教えてくれる、持続可能な社会の未来像」：白川勝信 氏 3

◆ パネルディスカッション

- 「細野高原の活用と保全から、SDGsを理解する」 16

コーディネーター：白川勝信 氏

パネリスト：太田長八、高橋佳孝 氏、山田賢一 氏、石島専吉 氏

◆ 分科会

- ・ 東伊豆会場：「利用・保全・継承」 31
- ・ 阿蘇会場：「阿蘇草原再生、新たなステージへ
～草原の恵みを守るための仕組みづくり～」 43
- ・ 蒜山会場：「人と自然の関係性の再生を目指して」 61

◆ 全体会

- ・ 各分科会からの報告 81

◆ オンライン見学会

- ・ オンライン見学会 97
- ・ 視察、オンライン見学会後の感想 101

■ 第13回全国草原サミット

- 開催地あいさつ 108
- 活動報告と問題提起、意見交換 109
 - ・ 前回全国草原サミットの報告／日高昭彦 氏(宮崎県川南町長) 109
 - ・ シンポジウムからの報告、問題提起／高橋佳孝 氏(全国草原再生ネットワーク代表理事) 110
 - ・ 各自治体の取組と課題 114
 - ・ 「未来に残したい草原100選事業」について 123
- 第13回全国草原サミット宣言採択 128

第13回全国草原サミット・シンポジウムは、
東伊豆町公式チャンネル(YouTube)でご覧いただけます。

第13回 全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆 開会式



○司会 皆さん、おはようございます。

この後、第13回全国草原サミット・シンポジウムを開会しますが、その前に、今日と明日の2日間のスケジュールについてご案内します。

本日は開会の後、9時10分より白川勝信様による基調講演を行います。基調講演終了後、10時30分より草原の活用と保全からSDGsを理解するというテーマでパネルディスカッションを行います。

その後、昼休みを挟み、午後1時から、東伊豆会場、阿蘇会場、蒜山会場で分科会を実施します。阿蘇と蒜山ではウェブ配信を予定しております。

当初のプログラムで予定されていた生石高原会場については都合により中止となりましたので、ご承知ください。

分科会終了後、午後3時20分から3分科会場の代表にご参加いただき、全体会を開催します。

本日の草原シンポジウムの終了は午後5時を予定しております。

ちょっと画面のほう変わりませんが、次に、明日、9月27日の予定ですが、午前10時30分よりオンライン見学会の実施後、昼休みを挟んで午後1時から午後3時まで草原サミットを開催いたします。

以上、2日間のスケジュール案内となります。

なお、本大会は、農林水産省、環境省、文化庁、静岡県よりご後援をいただいておりますことをご報告いたします。

それでは、時間となりましたので、ただいまより1日目の草原シンポジウムを始めさせていただきます。

第13回 全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆 実行委員長(開催地)あいさつ

実行委員長：東伊豆町長 太田長八



○司会 それでは、まず初めに、本大会の実行委員長である東伊豆町長、太田長八より挨拶を申し上げます。

○町長(太田長八) 皆さん、おはようございます。

第13回全国草原サミット・シンポジウムin東伊豆大会実行委員長、また、本大会の開催地であります静岡県東伊豆町の太田と申します。実行委員会及び開催地を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

まず、この大会に向けましてご尽力いただきました一般社団法人全国草原再生ネットワーク様をはじめ各種団体の皆様には本当にお世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。

また、本来でありますれば、皆様方にこの東伊豆町にお越しいただきまして、この細野高原をはじめとし、東伊豆町の自然を、また温泉などを満喫していただく予定でございましたが、この新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今大会はオンライン配信を活用した開催となったことから、ご理解をお願いいたしたいと思います。

この大会には、皆様方には草原の持つ公益化、また価値について広く国民にアピールいたしまして、全国各地で取り組まれております草原保全活動の現状と課題に関しまして議論を深めながら、草原全体の全国各地で開催されてきました。また平成28年から全国草原の里市町村連絡協議会を設立いたしまして、この草原保全に関し、全国の自治体と問題を共有することで保全を保っていきたいと考えております。

この東伊豆町細野高原は、全体で125ヘクタール、東京ドーム26個分の広さを有しまして、草原の先には太平洋がございまして、そこからは伊豆七島の一部であります伊豆大島をはじめといたしまして、大変雄大なスケールの眺望があります。この壮大な草原、これを未来につなげるため、山焼きなどの保全活動を進めております。また、山菜やススキなどの利活用、そして何よりもどのようにこの資源をいかに未来につなげていくかを議論すること、これをテーマといたしまして、未来へつなごう! 壮大な海すすきの草原とされました。うちの町は細野高原からススキが見えますもんで、一応、ススキのことを海すすきと言いまして、各地にPRしているところでございます。この海すすきという言葉のひとつ皆様に覚えていただければと考えております。

この全国の草原に関わりを持つ皆様の課題、そして取組を共有いたしまして、将来に向け、草原の持つ価値、またつなげていけるよう有意義な大会にしていきたいと思いますので、またよろしく願いいたしたいと思います。

結びに当たりまして、本大会の成功に向けまして、ぜひ皆様方のご協力をいただきたいと考えております。2日間、どうかよろしくお願いいたします。(拍手)

○司会 それでは、早速、草原シンポジウムのほうを始めさせていただきますと思います。

この後、白川勝信様による基調講演が始まりますが、準備の関係でしばらくお待ちください。

第13回 全国草原シンポジウム in 東伊豆

▶ 基調講演

「草原をとりまく里が教えてくれる、
持続可能な社会の未来像」

白川勝信 氏

○司会 それでは、ただいまより白川勝信さんによる基調講演となります。

白川先生は、生態学をご専門とされ、2003年より広島県北広島町の芸北高原の自然館に学芸員として勤務されております。現在は、湿原、半自然草原、里山林など、地域の人間活動によって維持されている生態系の保全をテーマに活動を展開されています。子供、事業者、行政、ボランティアなど様々な主体による自然への関わり方を見直し、新たな仕組みを組み込みながら地域と自然を将来に残していく道を模索されております。2017年には、第1回ジャパンアウトドアリーダーズアワード大賞を受賞されるなど、草原をはじめとする様々な分野での活躍をされています。

それでは、早速でございますが、基調講演のほうをよろしく願いいたします。

○講師(白川勝信) こっちはマイク持っていていいんですよ。じゃちょっと話させて……、その前に写真を撮らせてください。何ですかね、向こう側にいる人は多分、会場の様子が分からないと思うので、ちょっと撮らせていただきます。今、配信はもうされているんですか。ありがとうございます。

よろしく願いします。白川です。

今日、80分くらいお話しさせていただくと思いますので、よろしく願いします。

こんな感じですね、見えますかね。見えますかねっていうと、ライブ配信している相手の人から返事がないんで、分からないんですが、会場にいる人はこんな感じですね。東伊豆町ですね、いろんな人が来ています。

これは08年の東伊豆のサミットです。全国草原シンポジウム08in東伊豆ということで、今年の草原サミット・シンポジウムは1年間延びたんですけれども、本当は2008年に一度サミットをやる予定だったんですよ。それがあったので、僕としては、ああようやくこの東伊豆でサミット開催できて、本当にうれしいなと思っています。今回もここに来るのを楽しみにしてまして、駅前のキンメダイのオブジェをまた見れるかなと思ったら、キンメダイのオブジェがなくてですね、それで



実は自分がこうやって回している写真がなかったんですよ。だから、今回こそはキンメダイぐるぐるやるぞと思って、なかったんで、ああと思っていたら、移設されて、この役場の真向かい側の海の近くにありましたんで、ぐるぐる回させてもらいました。ちゃんとヒレも動きましたので、東伊豆に来たことがない方はぜひお立ち寄りください。

役場のすぐ横には朝市があって、前回はこの朝市に寄らせていただいて、たくさんの海産物が売られていて、やっぱり海の近くだなというふうに感じました。本当に懐かしい、懐かしい町で最高でした。

前回もこうやって細野高原の上に登って、たしかここは塩坂さんから教えてもらったフライトをしているところですかね、パラグライダーが飛ぶところで、何かこんなこともできるのかなという、草原っていろんなことができるんだなということをそのときに感じました。とにかく広くて一面ススキで、上から見れば海が見えるという、すばらしいロケーションだなというふうな記憶があります。

今日は、僕、一番最初に話させてもらうので、前回いろんな写真を撮っていて、どっちかというと食べ物とか、さっきのキンメダイの写真とか草原の写真とか、花の写真が多かったんですが、会場で1枚だけ写真を撮っていました。これどなたのスライドか分からないんですけども、こういうことが課題の提起というスライドがあったんですね。山焼きによって、草原という景観を維持することだけで十分なのかという問いかけと、草原の



維持活動に携わる一方、携わっただけの対価を受け取る、あるいは携わった人が対価を実感しているのかという話がありました。こちらの細野高原は、地元の集落の方たちが山焼きをされていますので、その方たちがちゃんと対価を実感されているのか、あるいはそこに税金を使っているわけですから、町民の皆さんがそれを実感しているのか。そういうことが前回議論になったと思います。それからどう変わったのかというのは後のパネルディスカッションで聞かせていただきたいなと思っていますところ。

前回のテーマは、忘れられた草原の再発見、その保全と活用ということで、生物多様性、外来種、シンニウが間違っていますね、これ。広島ならではの間違いですね。外来種侵入……、深入山という山があるんで、草原の山です。草原のやぶ化、森林化など、草原の質の問題について共有されていない。草原の生物多様性はどうなっているんだろう、景色としてはいいけれども、本当にそこは価値があるというのが認識されているのかというところの問いかけと、もう一つが草原を守ることによる生態系サービスや経済的恩恵を享受する仕組みがない。これについても話がありました。その後、たしか僕が記憶しているのは、都内の電車のつり広告に草原のことがかけられたりというPRをされたりとか、あるいは入山料を早い段階から取り始めた、草原ではあまりないのかなと思いますけれども、そういう事例を先立ってされたという記憶があります。今日はそういう話もまた後で聞かせていただきたいなと思っていますところ。

そして今年、2021年のテーマですが、今回はオンライン開催ということで、この東伊豆町、それから阿蘇、そして萩山のほうでも分科会が開催されます。大きなテーマは、未来へつなごう！ 壮大な海すすきの草原、そして、分科会のテーマは、保全・利用・継承、草原の公益的機能について、それから、茅の利用と草原保全との関わりということで、どちらかというと今、草原に話題になっているのは茅の利用とか、利用ですね、利用と

か草原の機能というところにだんだん目が移ってきたのかなと思っています。

先ほど課題として示されていた2つのことですね。2つ目は、そういう利用とか、草原の価値をどう実感するかという話だったんですが、もう1個、1個目の草原そのものの価値というのが果たして僕らは認識されているのか、希少生物とかですね、生物多様性のほうが認識されているのかどうかというのは、これはむしろ草原を研究する研究者が発信できているかどうかということになるので、ここ地元でも内山さんとかを中心いろんな研究が進められてますし、今から継続的にやっていって情報を出していけないといけないだろうなというふうに思っています。

今日こちらに呼んでいただいた縁というのが、僕らは草原研究グループというのを組織しています。西日本草原研究グループというのを組織して、これは萩山で調査しているんですね。これだけキキョウがあるところも珍しいです。自生のキキョウがたくさん咲いているんですね。僕たちは大体、10年前ぐらいは月に1回集まって、あちこちで研究していました。例えば3月は学会で岩手県に行っていたんですけども、十和田湖畔までちょっと車で走って行っていました。何かこんな雪があるのに、ちょっとでも空いていれば何か探したくなるのが僕らの常で、このときは、東北のほうに行くとかフキが大きくなるんですね、フキノトウも大きいのでびっくりしました。あるいは大阪の吹田というところで、町なかで調査をしたりしています。こんな住宅地の中なんですけど、ここの草原は、もうここの土地が売れてしまったら生き物がいなくなる。こんな町なかでも希少種というのはちゃんと残っているんですね。ずっと管理がされていけば、何ていうかな、開けた環境があつて、継続的に管理がされていけば、そこに生き物が残っているということが分かっています。それをじゃどうするかというのは次の問題なんですね。

画面共有が止まったんですが、大丈夫ですか。

○スタッフ 一度ちょっと。

○講師(白川勝信) 共有の再開、これですね。すみません。写真を今、見てもらおう……、まだ、すみません、声だけ聞こえていたみたいで申し訳ない。

吹田の草原はこんな感じですよ。

僕たちは草原研究会なんですけど、僕自身は高原の自然館という博物館に勤務しています。学芸員という仕事をやってまして、会場の皆さんの手元には、この高原の自然館のパンフレットが手元にあると思います。とてもとっても小さな建物なんですけど、博物館。博物館はこの辺には何かあるんですかね、ないですか。静岡

の県立博物館はすばらしい大きな博物館がありますよね。博物館の仕事というのは4つあります。あそうか、伊豆にもあれがありますね、動物園がありますね。動物園も博物館の一つですね。

博物館というのは4つの仕事がありまして、資料を集めて、資料を保管して、研究して、展示・公開します。これが博物館の責務で、学芸員の仕事ですね。最近テレビでも割と「プラタモリ」とかですね、学芸員の人が出て来てしゃべったりとか、あとは何かクジラが打ち上げられたり、リュウグウノツカイが上がったり、ダイオウイカが出てくると、何かよく学芸員の人出てきますよね。ああいう人に資料をとにかく集めていって保管する、あるいは美術館にも学芸員というのがいます。美術品を集めて保管して、研究して展示・公開する。この4つをやっているのが博物館の仕事です。美術品を集める美術館、動物を集める動物園、水族館、あるいははきもの博物館、鉄道博物館、切っ手の博物館ですね、いろんな博物館があるわけですが、基本的にはこの4つをやります。僕はフィールドミュージアムと言って、フィールド、つまり外の、どういうんですか、野外を博物館と見立てているので、町全体が博物館だという言い方をしているんですね。それどうなるのかというと、野外を建物の中に集めることはできませんから、地域に関する情報を集めて、地域を保全して、地域を研究して、地域を展示・公開している。例えば細野高原という地域、ここに関するいろんな情報を集めて、そこを保全して、そこを研究しながら、その情報を発信していく、そういうのが学芸員の仕事になると思います。

今日はちょっとこの学芸員の視点というのを皆さんと共有できたら、草原のことについて少しヒントになるのかな。

植物を保存するためには、例えば植物園は栽培をしますよね。博物館だったら押し花を標本にしたり、ためるんですが、フィールドミュージアムはどうするかというと、その草原をどう守るかということを常に考えています。僕も頭を悩ませています。特にその場所をどうやって保全するのとか、今日のテーマでもありますが、どうやって展示・公開、つまりみんなに活用していくのか。保全したり活用したりというのは、大きなテーマだし、正解がまだないものですね。

例えば、ここからは写真をちょっといろいろ見ながらお話したいんですが、この夏、僕は八ヶ岳をちょっと歩いていたんですけど、八ヶ岳というフィールド、これを保全しようと思ったら、どうするかな、考えると、もうここを例えば保護区にする。それ一つの方法ですよ。あるいは歩く道筋を1つ決めて、ここからはみ出ないで

ください。そうしたら、こういうコマクサとか、チシマギキョウは守られるかもしれない。人間が何も関わらないということですね。

八甲田山も登ってみました。八甲田山って、名前は聞いていたんですけども、行ったのはこのときが初めてでした。こんな雪の中をガイドの人と一緒に歩いたんですけども、これを保全するといっても、人間がどうするレベルのものじゃない。何もしなくても、この景色は多分残っていくだろう、雪の上ですからね。

こうやってエビの尻尾と呼ばれるような、これをじゃ博物館に持って帰れるか、これ展示・公開できないですね。気温が低いところで風が吹きつけるからこういう氷の形ができる。だから、人間にはまずつくれないというのは、そういうところは残すといっても、そのままにしておくか、温暖化を止めましょうということをするしかないんです。片方で、今日のお話のメインは、人間がいなくなっていくフィールド、こちらのほうが、どういえばいいのかな。関わりを続けるということで、やりやすい面もあり、やりにくい面もある。本当にさっきの自然の中というのは、禁止、禁止してしなないといけない、いろんなことを禁止したり、見守りするのはとても大変なんですね。でもむしろ関わり続けるということ、例えば有明海の干潟ですね。これも自然ですけども、ここの自然です。遠くまで遠浅の海があって、潮の満ち引きによって、満ちたり引いたりしています。こんな美しいすばらしい景色があるし、これが潮が引いたらこういう形。ここで行われている伝統的な漁業、こういうものというのは、じゃこの景色を、人が入っていけるこの景色をどう残すかといったら、捕り過ぎないということもそうですし、捕るためのルールをつくるという、人間側でこれ決めていけるんですね。人が関わっているところは、人間側が関わっていけば何か可能性があるんだろうと。

段畑って聞いたことがありますか、段畑。棚田か。棚田はよく聞きますよね。段畑っていう景色があって、これ宇和島の先のほうに行くとかいう景色があるんですけども、傾斜が激しくて、水がたまらなくて、この細い畑を造っているんですね。これ人がずっと石垣を積んで造った景色です。こういうものを残していこうといったときには、ここの農家さんが儲ければ多分この段畑の棚田は残っていきますし、こんな関係です。

阿蘇ですね、これは。阿蘇に行くと、山の斜面に横向きにずっと筋がついていて、これは誰かがつけたわけじゃなくて、牛は草を食べるときは横に横に移動するので、横に横に道が勝手につきます。これがつくことで、段畑じゃないですけども、ああいう段々ができていく。この景色すごくいいなと思っても、土木業者さんにこれ

造ってくださいと言ったわけじゃないですね。そうやって造っても多分残りません。ここを残すのは、牛を入れる。これが残すための策。一つ一つの景色に一つ一つのできてきた履歴がある。それをどう読み解いて、それをどうつくっていくか、これがフィールドミュージアムの学芸員の1個の仕事です。

美人林といって、ブナ林と言えば白神山地のブナ林も有名ですが、日本の中で有名なブナ林を幾つか上げていくと、出てくるのがこの新潟県の十日町市にある美人林のブナ、ここにも博物館があるんですけれども、その裏山です。このブナ林はブナが細いんですよ。東北のほうとか、ブナ林って割と広島の方だととても珍しい、原生林というイメージなんですけれども、東北のほうに行くと、森を伐採して何もしないとブナがこうやって生えてくるそうです。長野県とかも結構こういう若いブナの林があるんですね。だから、もしこの美人林のブナ、こんなブナ林を維持しようと思ったら、ある時期にここを全部伐採すればいいということになるんです。そういうふう人間に働きかけと風景とか自然というのがお互いに行ったり来たりの関係にすると。それを一歩ずつ読み解いていかないと、その自然をどう残すかとか、活用するかという話に行き着かないんですね。例えば棚田なんかもそうですね。こういうところにコンクリートじゃなくて、斜面を造って水路を造ると、生き物がそこにたくさんくる。

これは四国中央市、愛媛県の写真ですが、僕はこの写真がとても好きです。「ウォーリーを探せ!」という絵本をご存じですか。すごくいろんな絵が描いていて、その中にたくさんの人物が描かれていて、いろんなことをやっているんですけれども、その中にウォーリーが1人だけいるという絵本があるんですけれども、この写真を見ると、何かさっきの例えば棚田だったら田んぼが広がっているし、干潟だったら水と土が広がっている。この中を探していったら細かいものがたくさんあるんですよ。ここは四国中央市の大歩危小歩危とか、祖谷とか、四国は急な谷が多いんですけれども、山の向こうのほうを見てみると、隣の集落が山に張りつくように家が建っているんですね。あそこ人が住んでいるんです。だから、隣の家に行こうと思ったら、すごく斜面を上り下りしないといけないし、こちらから見えるあの家までも、1回下まで下りて上がっていかないといけない、そういう地域です。こういう傾斜の急なところでは、どういう農業をされているかという、狭い中にいろんな作物を作っていらっしゃいます。

これ1軒のお宅でされていると思うんですが、そしてここで特徴的というか、特産なのがお茶なんですね。

この斜面のところのきれいに植え込まれている、これがお茶です。

もう一つ目を引くのが画面真ん中ぐらいに三角の立っているのがススキですね。すすきの三角の山形のが見えますかね、これですね、これです。これはコエグロと言うのかな、肥料にするための役割が1つありますが、もう一つ大事な役割があって、こういう斜面だと、何もしないと、土がどんどん剥がれてきちゃうんですね。だから、こういうススキを置きます。特にお茶畑の下にもこうやってたくさん続いています。

先ほど、こうやって人間が関わってつくられたフィールドというのをどうやって守っていくのかなというのがとても大変なんですけど、ものすごく面白いテーマだなと僕は思っています。どうですか、面白くないですか。草原もその一つだってなるんですよ。

お茶畑、静岡県掛川市というところでもとてもお茶が有名なところで、新幹線からもよく見えるところですが、ここでも草が使われています。茶畑があって、手前のほうに結構、草地がありますよね。ここ、これ見たことありますか。通っていたら見える……、あそうか、ここ静岡だよ。そう、何か静岡、それはそう、何を言っているんでしょう。もちろんご存じですよ。あの「茶」という字の近くは草が植えられていて、その草もちゃんと敷き草に使われているんですよ。そうか、僕、今日、釈迦に説法みたいな話を今からするかもしれないですね。

静岡の茶草場農法というのは、世界農業遺産に指定されています。その中でお茶のパッケージの裏側にこういう葉っぱがついていて、この葉っぱが3個なら、認証制度をつくっているんですね。生物多様性貢献制度というのをつくって、3個だったら貢献度が高いですよ、2個、1個ということで、そういうお茶の味とか値段とかという別の価値をお茶につけています。そうすることで、わざわざ草を刈って、その草地ができることで生きる生き物を守っている農業ですよということを知らせながら、お茶の生産ができるようにしている、そういうところですよ。

そうか、静岡でしたね。でも、静岡の茶草場と同じように、にし阿波の傾斜地農耕、また四国に戻ってきたんですが、徳島県でされている傾斜地農耕というのも、これも世界農業遺産に指定されています。こういうところですね、もう斜面です。さっき写真で見ていただいたような、隣の集落に行くためにものすごく行かないといけないとか、家と家がもう斜面に張りつくようになっている。こんな感じですね。これ別にあまり誇張しているわけじゃないです。ここに立つと、カメラをどの角度が正しいのか分からなくなるぐらい傾斜が急なんですけれ

ども、電柱の立っている方向とか、杭とかを見ていただくと、斜めになっているわけじゃないことが分かると思います。こんな斜面のすごいところで農業をしているんですが、やっぱり見えるのがこの真ん中、コエグロで、近づいてみるとこんな感じです。こんな畑、僕、見たことなかったんです。これ畑なんです。見ていただくと、石がいっぱいありますよね。ここの農業ってすさまじくて、草がないとできない農業をされています。

どういうふうに草を使うかという、草をこうやって刻むんですね、機械で。後ろにあるこれらの道具を使って、すき込んでいくんです。すき込むときの音は、ジャリッジャリッといって、石を砕くような音がするんですね。大体、草の堆肥を使うときは、1回、草を置いておいて、それが発酵して、肥料になって分解されたところで畑に入れるのが普通ですよ。でも、ここでは、この道具、これも地元で作られた道具ですが、こういう道具を使ってすき込んでいく。この刃がいっぱいあるのは男性が使っていて、3本しかないのは奥さんが使っているという話をされていました。

こんな感じで、土壌が非常に、地力が弱いところで農業をされています。これ世界遺産になったんですけれども、ここでできるものというのは、ジャガイモとかヒエとかアワとか、タマネギも植えていますよね。そういうもので、じゃどう戦ったらいいたろうということなんです。世界農業遺産に認定されたはいいけれども、ここに何かの付加価値をつけるとしたら、なかなか難しいな、そういう話をされていました。それでも、僕は何かこの景色を見て、すごい景色だなと思います。これ全部、本当に機械が入らないし、人の手で一つ一つすじを耕して作っていった、それがこのコエグロと、それから周りの景色の中にあるというのは、僕は何かの価値がここにあるんじゃないかなというふうに感じるんですね。だけれども、ここにこうしたら残りますよという答えはなかなか出ない。そう思いながら帰ってきました。

こういうフィールドのものを残したり、考えたりするときに、僕はなんとなくの指針を5つ持っています。これは別に館の決まりとか、言われたものじゃなくて、僕自身が思っていることなんですけれども、何か働きかけて、そこを残していきたいとか、保全しましょう、活用しましょうとかいうときに、1個目が後戻りができるか。これやりましょうってやり始めたけれども、途中でやっぱりやめましょうというところができていないと、1回やり始めて失敗したのにずっと進めていくというのは、地域も一緒にやっている人も苦しくなるし、悪い方向にいつちゃう。

2つ目が暮らしに寄り添っているか。傾斜地農耕を

守るため、世界遺産なんだから、あなたやらなきゃ駄目ですよというような形では、多分、続いていかないの、そういう形で残しても意味がないだろうな。

3つ目が土地の歴史を大事にしている。傾斜地農耕をやっていたところを今までのその人の暮らしとか、その人たちが作ってきたものをやっぱり大事にしていきたいなというところに。

4つ目に、野生の生き物にも優しいか。あそこを改良していった、何らかの別のものが入ってくるとか、何かが失われるということがないように。

最後に、これはもう本当に何となくなんです、美しいかというところがあって、そこを見たときに美しいかなと感じるかどうかなというのがとても大事なんだろうと。

これはいろんなところに行っているいろんなフィールドを見るときに、ずっとぼんやり思っていることなんです、細野高原に来たときも、やっぱりその地域の歴史ってどうなんだろうというのが興味がありますし、野生の生き物がどういうふうかなとか、きれいなところだな。でも、その表面的なというのは何が美しいんだろうなというのをいつも考える。

こういう指針なんです、じゃあこういうもので残したいものは何なんだろうなというときに、今日の一つの言葉です。もう今日は、僕は80分ぐらいかけてこの言葉1個だけを皆さんと共有したいと思っています。言葉としては、共創資産というものです、共創資産。多分、検索してもあまり出てこないと思うんです。これ僕らで話して生まれてきた言葉です。どんなものかという、3つ書いています。今まで僕が話してきたのは、自然と人との関わりという話をしましたよね。自然と社会の関わりによって生まれて、地域に蓄積されてきた知識とか意識とか技術です。これを共創資産と言います。細野高原では、あの広い草原ですけども、地域にとってみれば、限られた面積をどう上手に使っていくかということがずっと長い間かけて、知恵と、それが大事なものだという意識が育ってきて、そこに火を入れるという技術というのができてきたんだと思います。この知識とか意識とか技術、これが共創資産です。

限られた地域の自然資源を保全しながら持続的に活用していくための共創資産が、多分、今はまだ日本各地に残っていると思うんですね。これは自然と社会、どっちかが失われると、共創資産も失われてしまいます。地域の人がいなくなれば、山焼きのやり方も分からないし、この風ならどこから火を入れればいいのかも分からないし、どのタイミングで入れればというのも、これは細野高原だけじゃなくて、僕の住んでいる芸北でもそうですし、多分、阿蘇の原野とか蒜山でも、地域の人

だけが持っている知識があるはずなんです。

自然だけだったら、ここは水が勝手に湧いてくるんです。熊本県阿蘇市の住宅地の中のほうなんですけれども、もうばんばん水が湧いてくる。これは自然の力ですよね。自然の力で地下水が湧いてくるけれども、その自然の力を使って人間が働きかけて水田にしていくと。水が豊かなところで水源を造る、これはいろんなところで造られています。

もっと水があるところ、これは徳島県の河口近くなんです。鳴門市では広いレンコン畑が広がっています。これは南海地震という地震が起きたときに、低湿地になったところを、今はレンコン畑に使っている。自然にできたものを人間がレンコン畑にして、レンコンを作っている。そこには地下水がしっかりありますから、これをくみ上げて、この機械ですね、右下のほうにあるこの機械。これは水がぶしゅーといつも出ています。これでレンコンを洗っています。ちょっとなめてみたら、鉄さびとしょっぱい塩の味がします。

こうして人間がレンコン畑を作っていくと、水路ができます。その水路に、これはわらを束ねて浮かべているんです。スサという、建築の方はご存じですかね。僕、なじみがなかったんです。壁を塗ったり、左官さんが使うときに混ぜるわらというのは、そのまま混ぜているんじゃないくて、1回こうやって漬けておいて、乾かして、それを使うそうです。徳島県は、こうやってクリークをたくさん、低湿地でレンコン作って、クリークを造って、そのクリークをまた使っている、人間が使っているわけですね。それで水路をもう完全に乾かしていくんじゃないくて、もう湿地と一緒に生きていく道を選んだことで、その水路にはこうやってオニバスが残っていると。オニバスは、別に植えたわけじゃないんです。人が湿地を全部変えるんじゃないくて、湿地の環境を生かして水路とレンコン畑で、そういう生活をしたから、たまたまオニバスが残っていた、こういう状況です。

だから、自然への働きかけを機械的にどんどん変えていくとか、大きな開発じゃなくて、そこの自然に合った生かし方を、使い方、生き方をすることで、今度、自然のほうもそれに反応する生態系ができていく。

今日ずっとこんな話ばかりしていますけれども、いっぱいあるんですね、日本の中に。

これは福島県の三島町というところで、連れてきてもらったのはマタギの集落です。マタギに会ったことがありますか。ある人いますか、東だからいるのかな。僕、全然マタギ、マタギとか本の中の人だろうと思っていたら、マタギの人がちゃんといたんです。日本の伝統工芸品に指定されている、こういう編み籠、奥会津編み組細工

という技術をこの人は伝承されていて、それを作っています。材料は山で取ってきたもので、後ろのほうにはこういうブドウのつるとか、クルミの皮とか、それをいつの時期に取ったらいいかとか、どんなサイズなら取っていいけれども、このサイズは残しておいたらまた来年取れるとか、そういうのを全部知識として持ちながら細工物を作っています。

その後ろには、こういう型枠ですね、かごを作るための型枠と、こういうものを持っています。カラムシとかキロロとか、ああいうものも使っていたらいいな。そういう使い方をすることで、山の中にはちゃんと野ブドウも残るし、いろいろな植物が残る。冬には、マタギなので熊を撃つらしいんですね。環境がちゃんと残って生き物が残る。生き物が残るから、それに合った暮らしというふうに、環境と人が行ったり来たりしながら暮らしている。だんだん……、もういいですかね、多分。

あと、これは兵庫県の淡路市です。小山に畑とか作物を作っているんですけど、棚田とか段畑とよく似ていますが、一番上のここ、ここ分かりますか、山の一番上。これ何だかご存じですか。これは近づくこんな感じ。何かあるかというと、特にな、広いんですけど、これはお墓なんです。淡路島、淡路の人たちはお墓を2つ持っていて、埋め墓と詣り墓と言うそうです。埋め墓は埋めるところ、詣り墓はお参りするところ。だから、亡くなったらここに体を運んで、ここに埋めると。それは同じ場所に地域のいろんな人が埋まるんですね。じゃここがお墓なのかというとそうじゃなくて、家の裏に墓を別で持っておいて、お参りするのとはそっちでお参りする。そういう独特なやり方をしているんですが、ここを管理されているので、もちろん今はないですよ、今は火葬になっていますけれども。でも、僕が行ったときには、まだ地域にそういうのを知っている人がいるよという時代でした。ここをやっばり草刈りするんですね。そうすると、そこに淡路島の希少種が残っている。

利用の仕方が、今回分科会でもカヤの利用とか、細野高原、観光とか、いろいろ草の利用というのはあるんですけど、別の目的で利用することで、そこが草原の生き物の生き場所になるということはある。高知県のお墓とかも、時々お墓で生けたものを燃やすからボヤが起きて山火事になって、草原の生き物が残るといふこともあるそうです。

これは白老村、コタン、アイヌの人たちの家です。こっちから見ると、全部入り口が見えています。反対から見ると裏口です。ちゃんと川に沿って入り口があるそうですね。こうやって草を使って壁まで、屋根だけじゃないですね、壁まで造ることで、断熱材に使っていると。

ちゃんとこういうふうな機能があるからこういうふうに使っていく中で、でも、片方でそれが自然に働きかけになるということです。

もう1個だけ、ちょっと話をしましょう。

これは新温泉町、前に草原サミットをやっていた上山高原ですが、集落が使える草原の自然は限られています。その中で一家族ごと毎日順番に刈るんですよね、草を刈る時期は。その順番というのは毎年替わるそうです。前日まで知らされなくて、次、あんたの番よって言われたら、急いで準備して、家族総出で下の集落からこの山に上がってくる。1日山で草刈りをして、集落みんなが公平に草を刈る。これ全部ススキです。そして、ここの草原が守られてきたそうです。

そういうふうに共創資産の特性というのは、ちょっとまとめると、多分、設計図があったわけじゃないんですね。いろんなやり方で、けんかが起きたりとか、何か使い過ぎたりとか失敗したりとかということを繰り返しながら、地域の中でそういうルールが多分、決められてきた。さっきも書いていたんですが、自然と人、どっちが欠けてもこれは維持できないもので、自然があるから人が暮らせて、人の活動があるから、その自然が残っているという、その「共に」という文字です。

それから、生み出されるためには、多分すごく時間がかかります。1回なくなったらできないですよ。それで、時間による検証、時間をかけて、いいものだけが多分今残っているので、今残っている共創資産というのは信頼性が高いんだらうなと思います。

ちょっと一息つきますか。大丈夫ですか。

これ何かずっと1人でしゃべっていると、不安になってくるんですけども、大丈夫ですかね。

じゃ、続けますよ、ありがとうございます。何か、うんうんとかうなずいていただいたりするととてもありがたいです。何かこう聞いている人の顔も見えないので、なかなか難しいですね。

これは与論島です。

じゃあ共創資産というのは過去のものなのかなという話をしていたんですが、これは与論島の与論民俗村と言って、昔の暮らしを展示しているところです。この辺は台風がとてもたくさん来るところなので、家は小さい部屋の雰囲気ですね。今だと大きな部屋に居間とか食堂とか、子供部屋とか造りますけれども、何か人が増えたら小さな建物を1個造るみたいな説明をたしか読んだような記憶があります。

これは就職して間もなく、僕は自転車で旅をしたんですけども、そのときに見て、多分、自分はこういうことに興味があるんだなと気づいたのがこのときだった

のかなと、今思い返すと思います。道路に街路樹としてヤシが植えられていたんですけども、ヤシに全部袋がかかっているんですよ。これは多分、ヤシの実を取って何かにするんだらうと思うんです、これ調べていないんですけども。ギンナンが、イチヨウ並木ってギンナンが落ちたらみんなが拾いに行きますよね。あれの先手を打って、ヤシはこういうふう実がつくんで、もう先に取っている。多分これがずっと未来になると、こういうのが共創資産の生まれるときなのかなというふうに、今思うと思います。こんな感じですね。ちゃんと実が集まっているし、後から掃除しなくて済む。ヤシは植えたものなので、自然物ではないんですが、こんな感じいろいろな知恵が時代時代で出てくるんだなと思います。

今、高知県の犬伏町では、備長炭が生産されています。もともと四国の南のほうから和歌山にかけて生育するウバメガシというカシの木を使うのが備長炭で、その場所じゃないとできないんですけども、この犬伏町では、こういうやり方では炭は焼いていなかったそうです。それを生産者をつくろう、高知県の県の事業で、高知の中で雇用を増やそうという事業があったんですね。その一つで備長炭の作り方を、親方を呼んできて、窯の作り方から教えてもらうというやり方を始めました。こうして窯をついて、生産者を1人ずつ増やしていった、生産をしている。これが窯の外ですね。ものすごく大きいものです。2週間で木を詰めて、2週間で焼き上げるという、とても時間のかかるものが備長炭なんですけど、大がかりです。芸北の山の中でやっているような小さい窯とは全然違いますね。

こういうところも共創資産が今生まれるところなんだらうな。なぜかという、今は、町内にある森全部の木の量を量ることができずから、計画的にもう窯は30基までというふうに決めているそうです。それ以上窯を作っても、木を取り過ぎてしまうから、持続的な生産ができない。なので、先にもう量を量ってですね。昔はそういうことできなかったんですけども、今はそんな生産とか利用ができる時代になったということかなと思います。

事例としては、これ最後になるのかな。いいなと思った事例です。

これは中海ですね、松江市の。真ん中のほう、何台か船が出ていて何かやっているんですけども、こうやって山盛り、海からすくっています、中海。これはオゴノリという海藻を取っているんですね。オゴノリ、聞いたことありますか。多分ないと思うんですよ。オゴノリって、汽水域にしか生えないそうです。海水と淡水が混ざるのが汽水域ですよ。しかも、ある一定の塩分濃度し

か生えないので、ちょうど中海の環境が合っていて、中海で今見られるという、何か珍しいものだと思います。それをばんばん取るんですね。僕も取らせてもらいました。長い柄のついた、何かこういうすくう道具を使って取っていました。それを岸に運んで上げています。これ誰がやっているかという、漁師さんがやっているんですね。

中海というのは、干拓事業で1回、干拓の事業が始まって、それをやめたってやめたところです。干拓の事業のときに浚渫をしたりとか、堤防を造ったりで水の流れが全然変わってしまいました。そのために何もしないでおくと、このオゴノリがたまってしまって、中でヘドロになるんですね。これがヘドロになってしまうと、海底に卵を産む魚が卵を産めなくなる。だから、漁師さんにとっては、これを取らないといけないんですね。海の掃除をしているわけです。

これだけだと、何かこう、漁師さんが海の掃除をしているのねなんですけど、この取り上げられたオゴノリは集められて、トラックに乗せて運ばれて乾燥されます。こうやって乾かして、こんな感じで肥料になるんですね。塩分濃度が高いところの海藻だと、上げるとどんどん塩が畑に入ってくるんですけれども、汽水域なので塩分濃度が適度に低いし、これをどのくらいまいたら野菜が育つかというのをこの地域の農業指導員の方がすごく研究されていて、畑ごとに見ていきながら、この畑だったら、こういう感じでまいてくださいというのを一緒に指導している。これってすごいなと思って、海の草、オゴノリを取ることで海もよくなるし、今度それが畑に入っている野菜を作る。だから、無駄がないですね。

草原シンポジウムでした。そろそろ草原の話を始めようかなと思います。

今回のテーマは、未来へつなごう！ 壮大な海すすきの草原ということで、海と草原、こんなに近くにあるところでは、何か草原のものも使うことでできてきた草原なら、今の時代に合った使い方を探していけばつながるんじゃないかというのが多分今、大分全国で考えられている流れだと思います。それが使って草原がなくなるんじゃなくて、持続的に使う方法をどうするかというのが多分議論ですよ。

今日はタイトル、草原を取り巻く里が教えてくれる、持続可能な社会の未来像ということで話させてもらいます。

草原を持つ自治体が全国にどれだけあるかというのをちょっと調べてみました。全国には1,902ぐらいの自治体があるんですけれども、草原を持っている自治体は多分220より多い。この以上と書いているのは、まだ知らない草原があるので、こう書かせてもらったん

ですが、地図の上にもこんな感じです。どうなんですかね。10%というのは、僕は結構少ないのかなと思っています。何かカヤぶき職人さんが300人、200人くらい、おなじぐらいの数なんです。でも、全部が全部カヤの草原じゃないので、これは全国草原再生ネットワークが持っている資料を基に作った地図なので、まだここから落ちている草原もあるでしょうし、ちょっと性質の違う、例えば牧草地みたいなものも入っているの、はっきりした数はちょっと出てこないんですが、そう遠くない数かなというふうに思います。全国にありますよね。全国にあります。

この草原の数だけ多分、共創資産というものが残っていて、今日の一つの結論的なところなんですけど、今回の件はどうやって伝えていくかという話の中で、草原を伝えていくために必要なもの、もう大分見えてきたと思うんですけども、1つ目は適切な方法、2つ目は適切な方法を実行する力、力というのはお金かもしれないし、人力かも、ヒト・モノ・カネとよく言われますが、そういうものですね。その実行する力を今度は継続するための仕組み、ある1年間だけ山焼きができたね、あよかった、よかったじゃなくて、翌年も翌年も、もっと言えば10年後も、ここに僕らがいなくなる100年後ぐらいもできれば続いてほしいなと思えば、継続する仕組みを何か考えないといけない。

それから、方法とか力とか仕組みを可能にする法令ですね。これはもう行政の仕事です。北広島町では、過去に野焼き条例というのがありまして、その中で山焼きができない書き方になってたんですね。なので、書き換えました。草原サミットがあったのを機に条例を見直して、ちゃんと条例の中で焼けるようにというふうに見直しました。こういう本当細かいところではあるんですが、社会の中で残していくためにはこういうもののもとても大事です。

最後の1つが上の全てを共有して伝えるための普及、あるいは教育というものです。今日この後、具体的に少しこの部分もお話しようと思います。

ちょっと先に条例の話なんですけど、北広島町は条例をつくっています。生物多様性の保全に関する条例というのをつくっていて、それについてはこのパンフレットの中に載っています。一番最初にお話したような自然の保護という、入らないでくださいとか取らないでください、そういうことももちろん規定はできるんですが、もう一つは、里山のようなところを守る活動を町が応援しますよということもこの条例の中に書かれています。そういう形で、役場の職員、僕、役場の職員です。町民さんとかから役場はなかなか動いてくれんという見方

もあるかもしれないですが、動く根拠がないと、僕は動いちゃうと、税金使ってお仕事しているので、皆さんのお金を適当に使うわけにはいけないので、なので、まずは条例をつくってみて、こういうことをしていきますよというのを考えました。

そういうものとか、あとはこの画面の真ん中にあるのが町の全部の生物のデータを調べました。静岡県は博物館があるんですが、広島県は博物館はないんですね。静岡県の博物館に行くと、どこにどの植物があるかというのが全部データとして調べられています。もちろんこの東伊豆町に残っているので、それをもう1回、町レベルの資料として1回起こしてみることはとても大事なかなと思います。北広島町はなかったんで、実際に何年もかけて調査をしました。

それでもう一つがレッドデータブックです。これは、レッドデータブックというのは環境省も取りまとめていますし、県も取りまとめているんですが、町は町として取りまとめました。この理由はなぜかという、国とか県では一般的な種類であっても、町の中では希少な種というのはあるんですね。ほかのところではたくさんあるけれども、うちの町にはほとんどいないよ。あるいは逆によそには希少かもしれないけれども、うちにはたくさんいるよ。そういうものをちゃんと見るためには、町レベルでこういう資料とか、あるいは条例というのをきちんと整備していくことが大事だろうなと思っています。そういうことで作りました。

じゃその北広島町、どんなところかというと、西日本ですね。面積は646平方キロメートル、標高が200から1,223メートルなんで、海がありません。人口は1万7,937人です。東伊豆町と比べてみますと、面積が東伊豆町77.8平方キロメートル、これはホームページで見せてもらいました。標高は、海があるゼロメートルから、万三郎岳が一番高いんですか、これ合っていますか、地図で見たんですけども、1,400メートルあるんですね。何かこれを見て、おおってやっぱりちょっと興奮しました。噴火と造山運動でぐいっとこんなに海から近いところで高い山もあるんだな。あと、人口は1万1,701人です。北広島町はもともと4つの町が合併してできたんですが、今日お話しする事例は芸北地域という一部地域のお話です。この高原の自然館があるのも芸北地域です。

芸北地域の面積は253.6平方キロメートル、それでもやっぱりちょっと広いですね。標高は420メートルから、一番高い山があるところなんです。人口は2,011人、ものすごく少ないですね。東伊豆町よりも面積としては3倍ちょっと、3.5倍ぐらいあるのに、人口は5分の1以

下。もう本当に過疎のところですよ。

その中で、まずは町同士の植生、植物の様子を見てみると、北広島、これ実際の大きさの比率を同じにしています。イメージが湧くかなと思います。でかい町です。こんなに大きいのに市じゃなくて町ですね。全国平均と比べてみると、特徴的なのは、まずどちらも森林が多いですね。自然林は北広島町が多いです。東伊豆町はどちらかというと植生の比率が北広島町よりも多くなっている。二次草原、これはいろいろなものが混ざっているんであれですが、これはどちらの町も全国平均よりも少し多くなっていて、農耕地が全国平均より少ない。市街地、このグレーのところが市街地ですが、市街地は東伊豆町は全国平均に近いような形ですけれども、北広島町は市街地はあまりないという違いがあります。海もないんですね。山の中の町です。

そこで行われている芸北茅プロジェクトというのを紹介します。これは多分、ちょっといろいろ参考になるのかなと思って、このプロジェクトがあったので、今日しゃべりなさいと言われたのかなと思っています。

芸北にはこういう山があります。ここは山焼きをしているところですね。ずっと昔から放牧とか、草を取ったり採草が行われていた山で、雲月山と言います。この山はササユリというこのユリが咲いて、これは町の花にもなっています。隣町の花にもなっています。そのぐらいこの地域ではササユリが愛されていて、身近な花なんですね。

こういう草原は何であつたかという、この草原が利用されていた時代があつて、例えば堆肥とか山菜とか、飼料、敷き草、屋根材、それからここで遊んだり、薬草を取ったりという、いろんな恵みを山から受け取っている。だから、毎年地元の人はこの山を焼いていたわけなんですね。

ところが、今、山が放置されています。この雲月山も半分以上が放置されています、一部で山焼きを始めたんですけどもね。放置されるとどうことが起きてくるかというと、これは一般的な話ですが、まず、生態系サービスが低下していく。草原から得られていたものが得られなくなるし、景観も悪くなるし、絶滅危惧種の増加、増加という意味は、今までは普通にいたものが絶滅危惧種になっていくという意味です。

そこで何とかしないといけないということで、例えばボランティアという形で労働力を集めてみて、みんなで山を何とかしようということをしてみたい、あるいは、そこに行政などから資金を投入して、補助金によってこれを解決しようということが各地で行われています。たしか前回、こちらの東伊豆に来たときに、年間の山焼き

の予算を聞いて800万円、びっくりした記憶がありました。すごいお金が山に吸い込まれているなというふうに感じたところです。でも、これは全国で起きていることですし、草原に限らず、先ほど見ていただいた里山とか、いろいろな自然に僕らの税金が吸い取られているわけですね。そういう社会資本の喪失がいろんな草原で起きている。これをどうにか変えていきたいなと考えるわけです。

今までの草原サミットでも、草原を守るための労働力をどうしようとか、資金をどうやって集めようかという話も過去にはありました。僕が初めて草原サミットに参加したのは、たしか2007年の蒜山の大会のときだったんですが、岡山県の蒜山では、その当時、どうやったらそういう資金が集まるかなという会話をした覚えがあります。

ただ、少し変わってきたのは、こういうふうなどうやって労働力や資金を集めるかという話から、今は放置された草原をもっと利用しようという議論に変わってきましたよね。今回のメインテーマもそうですし、各会場での分科会のテーマもそうなんですが、利用というのがキーワードにもう既になっています。その利用が1つの利用方法じゃなくて、前半で見ていただいたような生態系との関係でもものすごくたくさんあるんですね。よそでやっている利用をそのままぼんと持ってくるんじゃないくて、まずはそこでの利用を考えていくのが大事なんだろうと考えています。

芸北では、こんなことを始めています。今までもボランティアで草刈り、ここにはカヤ刈りと書いていますが、もともとは草刈りをしていたんです。草原を守るために火入れ、山焼きができない草原をみんなで草刈りをしていたんですね。やぶになっていると刈り払っていたんですが、ここ数年は秋にはカヤを刈るようになりました。そのときには子供たち、ついてきた子たちがこんな感じで、もうすごく楽しそうに遊んでいます。最近の子はインスタグラムもやっているの、こういう映像写真を撮ったりして遊んでいます。このときは子供が撮ったんじゃないですね、カメラマンが撮ってくれました。

こうして集めたカヤがどこに行くかというと、すぐに屋根に行くんじゃないくて、市場に集めるようにしました。これ名前、茅金市場と言います。カヤがお金になるので、茅金市場。単純な名前ですね。こういう市場をつくって、そこに出荷している。これはボランティアの人だけじゃなくて、地域の住民の方ならどなたでも、地域住民といっても、もう持って来ていただける方からどなたでも、この日のこの決まった時間に持ってきてくださいということで、1年に1回だけ市場を開けています。この日に

地域の人がみんなでカヤを運んで持ってくるわけです。

この建物は、もともと小学校の体育館でした。学校の統廃合によって、ここは閉校になったので、そこの中に鋼管を組んでカヤを置けるような場所を作りました。これを持っていくとお金がもらえます。だから、地域の人には持ってきてくれるんですね。

もらえるお金は日本円じゃないんです。せどやま券という地域通貨なんですね。この地域通貨、名前はせどやま券です。単位は石、1石が1円なので、この見えている券は千石、1,000円として地域の中で使われます。有効期限もあります。6か月以内に使わないといけない。6か月の間ずっと持ったままだと、これ紙切れになっちゃうんですね。だから、みんな使います。しかも、地域の中で使いますから、地域の商店にお金が入るわけですね。こんな感じです、使用例ですね。こんな感じです。地域のみんなで集めたせどやま券でちょっと1杯やりましょうかというところですね。最初はガソリンとか農機具とか、農機具屋さんとかいろいろなところで使えます。アイスクリームを食べたり、温泉にも入ったりできます。

集まったカヤは、屋根の修復に使われます。北広島町内、数は少ないですが、かやぶき屋根の民家と、あと展示しているカヤぶき建物があるので、そこに使われますね。地元のカヤを使って、地元の屋根が張れる。

これ広島県には、国の文化財になっている建物もあるんですけども、町外にこうしてカヤが運ばれて使われることもあります。

ちょっとまとめてみますね。

草原、ススキの草原からカヤが集められて、そこに地域通貨を支払うと、地域の中でお金が循環していく。そして、集まったカヤはかやぶき屋根の現場に出荷されて、そこから収入が入ってきます。その収入の中から地域通貨の交換としてお金が支払われます。収入のほうが入入れのカヤより多い……、仕入れの値段よりも販売の値段のほうが高くしてあるので、これは茅金市場のボランティア事業ではなくて、ちゃんと収益を上げている活動になります。具体的には、3束持ってきてくれたら1,000円、20センチだったかな。規格はこのパンフレットの中の1ページ目に書いています。3ページ目ですね。藝州茅の規格ということで、こんなカヤを持ってきてください、こんなカヤを持ってきてくれたら、今の値段は3束でせどやま券1枚ですね。販売のほうは基本価格が1束850円です。高いですか……、そんな感じで流通しています。

こういう仕組みが回ることで何が起きるかという、草原ですね。先ほどから話になっている野生生物、草

原の生物の保護とか草原の景観の保全とか、獣害抑止といったような多面的機能が山で発掘される。お店にそのお金が行きますので、地域経済が少しでも活性化します。そして、文化の面で言えば、カヤぶき建築がそれぞれ保存されたり、技術が伝承されたり、村落の景観が保全されるという文化の伝承があります。

どのくらいのこれ金額回っているかというのを見てみると、そんなに大勢ではないですね。2015年から始まって、最初は持ってきてくれる人が5人で、集まったカヤも100束でした。2年目は6人になって200束になりました。すごい増えましたね。3年目は9人で234束、8人、10人、14人と増えていって、持ってきてくれる人がどんどん増えている。2,000人、約1,000戸の集落ですから、10戸で1%なんですよ。1.4%の人が持ってきてくれるということになります。それで集まったカヤを販売して、売上げが下のほうに書いてあります。この売上げの金額は、ばらばらなんですけれども、実は最初の年はカヤの束をすごく大きくしていたんですね。それで、すごく束数が少ないけれども、金額が大きくなっています。

この下に1行ちょっと付け足しますね。

現在の学年と書かれています。これ何かというと、茅金市場は中学校の活動としてやっています。中学校2年生が茅金市場を運営しているんですね。今、その子たちが学年で何年生になっているかというと、一番最初に茅金市場を実行した子は今、大学2年生になっています。この時間間隔って結構大事だと思うんですね。子供はずっと子供じゃなくて、これを知った子が今何歳か。

ちょっと茅プロを通じた中学生の学びを見ていただきたいと思います。

茅プロ、事業としては最初こんな感じです。これ中学生ですね、もう大人みたいですけれども。カヤを刈ります。みんなで束ねます。最初は下手くそですけども、だんだん上手になります。途中でカヤぶき職人さんから指導を受けて、こんな曲がったのは駄目だとか、ちょっと細過ぎるとか、先がそろっていないとか、束ね方をちゃんと指導を受けるんですね。それを運びます。実際に自分たちでも刈るんですが、大事なのは受入れのほうなんですね。茅金市場での運営は、中学生がやっていますと言いました。中学生が地域の人にチラシを配ったり、声をかけたりして、家の近くにあるカヤ持ってきてくださいねというふうに言うんですね。そうしたら軽トラに積んで持ってきてくれるので受け入れます。みんなで運びます。規格に合っているかどうかをちゃんと調べながら受け入れています。曲がったカヤは使え

ませんから、これは駄目ですよっていうのはちゃんとわからないといけないんですね。これ結構ハードルが高いんですが、先生に手伝ってもらったりしながら、こういうのは駄目ですよということをちゃんと言う、これも学習です。こうして何束あるかというのをちゃんと数えている役割の子もいて、それぞれの子がそれぞれ役割分担しています。車の誘導をする子もいます。

こうして受け入れたカヤをどんどん並べていくわけですが、もう当日は先生たちも総出で、総出じゃないか、先生たちもやってきて、なかなかあまりない光景かなと思います。

せどやま券の発券も中学生がやりますね。ちゃんと数を間違えないように数えて、券の枚数をカウントしていきます。これ中学生の側が券を支払うほうですね。これを渡していくと。地域の人に渡っていく。何かほっこりしますよね。地域の人が持って来て。

実際に子供たちがお金を触ることで、先ほどのこの全体像にもう一つ、教育の側面が加わるんですね。地域資源への気づきとか、カヤってお金になるんだな。あんなどこでも生えている草なのに、草原ってそんなに価値があるものなのか、あるいはお金をちゃんと使って、商品とお金をやり取りする、あるいはカヤを販売するとかっていう話を通じて、ちゃんと経済に関わるんですね。これが大きな学びになります。これが次世代の担い手育成につながる。

今、大学2年生の年齢になっていますから、これからどうなるかというのがちょっと楽しみなところですよ。

実際の成果としては、去年は14人から591束受け入れて19万7,000円を、約20万円分発券しました。授業やPTA活動で自分たちで250束を収穫したので、71万円余りで販売したいなと思っているところです。まだこれは販売中ですね。その差額の50万円ぐらいは自分たちの収益になって、教育活動に使うと。刈ったカヤは文化財建築の補修なんかに使われて、結果として草原も守られる。僕がやりたかったのは草原の保全なわけですが、仕組みをつくることで、その草原が守られるという、そういう形になっています。

ちなみにお金、何に使っているかなんですけども、まずは中学校に冷水機を設置したりとか、最近暑いですからね。ウォーターサーバーを自分たちで買ったり、修学旅行に資金助成として、これはPTAのほうから保護者に対して1万円ずつだったかな、去年は。お金が支払われます。修学旅行で校長から給与が支給されます。これはちょっと内緒にしておいてください。サプライズでバスの中で給料袋が配られるんですね。自分たちが働いて稼いだお金が自分たちのところに戻ってくる。

あと、カヤプロ銀行というのもやっていて、3年生の授業ではバザー活動をするんですが、最初に商品の仕入れとかにお金がかかるので、貸付けをやっているそうです。それから、豪雨災害の被災地に寄附をしたり、これを子供たちは自分たちが草原の資源を使って稼いだお金でやっているということですね。

こんなふうに共創資産というのは、多分、全国各地でつくられていますし、それをまねしていくことが大事なんだろうなと思うんです。小さいことですが、例えば阿蘇で使っている火ぼてというの、これをボランティアの人たちが自分たちで作って、自分たちが使えるようにならないと、阿蘇の火入れには参加できないんですね。野焼き講習がたしか2日間あるんですよ。

○会場より（「今日」と呼ぶ者あり）

○講師（白川勝信） 今日ですか。ちゃんと講座を受けて作って参加していくことで、共創資産が受け継がれている。

あるいは、上ノ原のほうに行ったときには、茅刈り講習会というのに参加させてもらいました。大学生とかいろんな人が参加していたんですけども、そこで今度は御殿場のほうから……

○会場より（「ここからがこういう感じで、大体うちのほうじゃ足でやっちゃうもんで。これで1束ですね、うちのほうでは。この一番下の目盛りが一番小さい束の位置で、これで1束。ちょうど……」と呼ぶ者あり）

○講師（白川勝信） この人、なかなかほどけなくて、結んでくれなかったんですけども。こういう形で受け継がれていたり、地域から地域に共創資産が技術移転されていますよね。

あるいは、これはカヤぶき技術の伝習施設、大内宿というところ、福島県ですね。そこでは、廃校になった学校の中にこういう屋根ふきの、屋根を小さいのを作って、こうやってカヤをふく方法を体験したりしています。地域にはカヤぶき職人がたくさん生まれているそうです。こういう景色が残っているところで、観光客がたくさん来るところですね。それを支えるための倉庫もきちんと造っていて、下を空気が通るようになっていたりとか、カヤのサイズに合った高さにしていたりとか、いろいろな工夫が見られました。

これは和歌山県の大学生がやっている、生石高原の人たちがクラウドファンディングで350万集めています。これでカヤを刈ったりする資金にしたいという活動をしています、大学のサークル。

そろそろちょっと事例としては最後になるんですが、これは諫早市の岩谷口の草原です。この草原、ちょっと写真があれで見にくいんですが、この煙が出ていると

ころからずっと全部斜面が草原です。ここもすごいですね。この火入れはすごく珍しくて、ちょっと写真で見ていただくと、集落の人たちが作っているのは火をつけるための道具です。竹の筒に1つの節だけ穴を開けて、中に油を入れてあります。そこにわらを刺しているんですね。そのわらを刺して、これを軽トラに乗せて持っていくと。こんな感じで火をつけています。何か油をびゅびゅっと出しながら火をつけています。これが火入れの風景ですね。

でも、ここで注目すべきなのは、この火のつけ方も面白いと思ったんですが、こっちの動噴です。軽トラに乗せられた動力噴霧器。火入れのときには、この動噴がついていって、ずるずると引っ張って、この水槽から水をまくと。つけて、ちょっとでも広がりそうだったら、すぐ消していくんですね。これが非常に効率的で、この集落は十六、七人で火入れをしていました。たった十六、七人であの広さができるのは、こうやって軽トラが道路のほう、これは斜面の下部の道路ですが、そっちの道路はもちろん、斜面の上にもこういう軽トラが入れるところがついていて、山と、ここまで木が出ているんですね。炎が上がったら燃えそうになるわけですが、もうすぐばあっとかけて消せる体制にあると。だから、少人数で山焼きができるわけですね。

ここには多分、ヒントが詰まっていて、誰でも焼けるようにならないのかなというも僕は考えているわけですが、秋に防火帯、焼いていない草原は防火帯焼きを始めてみるかな、これはうちのほうのことです。うちのほうは防火帯は焼かずに、当日、草刈りをするだけなんですけど、これ防火帯焼きも、安全にするためには大事なことかなとか。あるいは防火帯に車両が入れるようにしてみるというのが今のことです。

もう1個、これは何か昨日、夜に思いついたんですが、車両が入れる道路は難しいけれども、水が回せるパイプを通しておいて、山水を引くのに黒いパイプとか、農業用に売っていますよね。あれを回しておいて、何か所かに蛇口じゃないですけども、出るところをつけておいて、山焼きの日だけポンプでばあっと水が回るような仕組みにしておけば、ここはちょっと、細野高原は広いですが、うちのほうにある山ぐらいたったら、全部回すのにそんなに広くないなと思ってました。とにかく山焼きをどうするかというのはとても大事なことです。

事例について最後だったんですが、東お多福山の保全ですごく僕が影響を受けたとかびつくりしたところです。ここは都市の中にある草原なんですけれども、みんなこれじゃがんで、鎌とかはさみでちょきちょきサ

サを刈っているんですね。この光景を見たときに、僕はすごいなと思いました。でも、ちゃんと人間の力で刈り切れました。作業が終わったらこんなきれいになっていたんですけれども、その一角で何かやっている人がいたんです。この人が何かしゃがみ込んで、ススキをずっと集めていたんですね。このカヤを、たったこの日はこのぐらいでしたけれども、みんなで持って帰りました、カヤぶきにするんだと言っていました。何年前だったかな、随分前だったと思います。サガラさんという人なんですけれども。それで、なるほど小っちゃくても、地域でこうやって使い始めることがまず大事なんだなと思って、たった数束であるんですが、その数束はきちんと集めればちゃんと屋根の上で何年も役割を果たす。そのときに、今のサガラさんの風景もそうなんですが、もう1個気になったのが……

(保全活動中の太鼓の音)

これだけなんですけれども、何か愉快だなと思って、こういうのっていいなと思いました。でも、これを言葉にするには、何かうまく言えないし、何かのためということをやったわけでもないんだけれども、多分、人間ってこういう浮かび出てくるものがあるし、そういうところが草原の中に出てきたというのがすごくいいなと思ったところですよ。

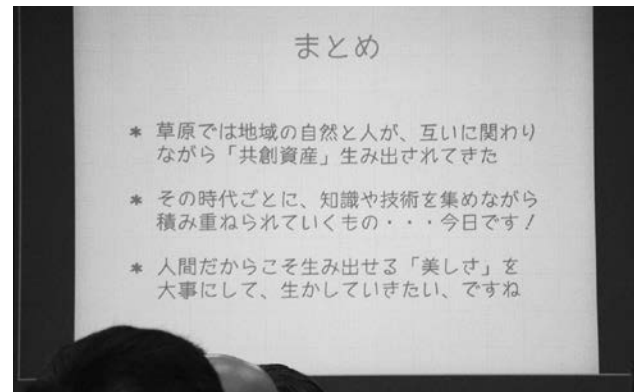
そういう草原がいろんなところにあって、景色だけ見ても、とてもきれいですよね、曽爾高原、奈良です。今から分科会がある真庭の蒜山、遠くに大山を臨んでいる広い広い草原ですね。それから、もちろん阿蘇、とても広くて、阿蘇の中にもいろんな草原があるし、東伊豆町、懐かしい草原で、僕は明日行くのをとても楽しみにしています。オンライン参加ですよ。ここには大事な湿地もある。

こういう草原が全国にあって、そんな話ができて、またどこかで太鼓の音が聞けるのかなとちょっと楽しみにしてるところですよ。

まとめます。

あまり大したまとめじゃないんですけれども、草原では地域の自然と人が互に関わりながら、共創資産が生み出されてきました。これが今日の話の主なところですよ。これは草原だけじゃなくて、いろんな生態系といろんなその地域とが関わりながら、その地域に独特の知恵や技術がある。

2番目に、その時代ごとに知識や技術を集めながら積み重ねていくものが共創資産で、その知識や技術を交換するのが多分、今日なのだろうなと思っています。各地で話がありましたし、今日は皆さんに芸北の茅プロをはじめいろんなことを聞いていただきました。



その最後に見てきたような、人間だからこそ生み出せる美しさというのが一つ草原を体現してくれているのかなと思って、大事にして生かしていきたいですね。以上で終わります。

最後に、いろんな方に今日のスライドを作るにあたって協力いただいています。特に今回の大会を開いていただいた東伊豆町と、それから日本の各地の草原の方に感謝します。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 白川先生、どうもありがとうございました。

学芸員のお仕事の視点での全国の事例のご紹介ですとか、あとは自然と人間、自然と社会の関わりから生まれる、今日初めて聞きましたが、共創資産という言葉ですとか、中学生の取組ですとかいろいろ興味深いお話をしていただきました。

ちょっと時間があまりありませんが、お一人でもお二人でも、もし今日お話しいただいたことでご質問等ありましたらいかがでしょうか。

この後もですね、この次のパネルディスカッションのほうも、白川先生にコーディネートをしていただきます。お手元には質問の用紙もお配りしてありますので、今の基調講演のことも含めて構いませんので、そうしましたら、次のパネルディスカッションで質問等をしていただければというふうに思います。

先生、ありがとうございました。

改めまして、感謝の拍手をお願いいたします。(拍手)

○講師(白川勝信) どうもありがとうございました。

○司会 それでは、続きまして、休憩を取りまして、10時35分からパネルディスカッションのほうを始めたいと思います。準備の関係もございまして、35分まで休憩とさせていただきます。よろしくをお願いいたします。

第13回 全国草原シンポジウム in 東伊豆

▶ パネルディスカッション

「細野高原の活用と保全から、SDGsを理解する」

コーディネーター：白川勝信氏

パネリスト：太田長八、高橋佳孝氏、山田賢一氏、石島専吉氏



○司会 それでは、ただいまよりパネルディスカッションを開催いたします。

コーディネーターは基調講演に引き続き白川先生にお願いをいたします。

それぞれのパネリストの方を私のほうからご紹介をさせていただきます。

まず初めに、太田長八東伊豆町長。

○パネリスト(太田長八) 太田です。よろしくお願いします。

○司会 続きまして、一般社団法人全国草原再生ネットワーク代表理事の高橋佳孝様。

○パネリスト(高橋佳孝) 高橋です。よろしくお願いします。

○司会 稲取地区特別財産運営委員会委員長の山田賢一様。

○パネリスト(山田賢一) 山田です。よろしくお願いします。

○司会 東伊豆町観光協会会長の石島専吉様。

○パネリスト(石島専吉) 石島です。よろしくお願いします。

○司会 それでは、白川先生、よろしくお願いいたします。

○コーディネーター(白川勝信) また白川です。よろしくお願いします。

ここからはパネルディスカッションということで、先ほどは僕のほうから一方的にたくさんお話をさせていただいたんですが、今日は4人の方に来ていただいているので、僕はここからは進行役で、4人の方それぞれの

話を聞いていきたいと思います。皆さんそれぞれに各分野で活躍されている人ばかりが集まっていますし、お一人お一人の話もじっくり聞きたいんですが、多分ここでお互いに話していただくと、面白いものが何か生まれていくんだろうなと思って楽しみにしています。

それでは、最初に少しお一人ずつ、8分くらいかなとお伝えしていたんですが、自己紹介とか活動とかを教えていただければいいと思います。特に肩書のほうなんですけれども、この細野高原の場合、東伊豆町との関わりとか、そういうことも含めてよろしく願います。

○パネリスト(太田長八) そうですね、先ほど挨拶した町長の太田と言います。

ちょっと私のほうから町をちょっと紹介させていただきたいと思います。

まず、面積とかそういう人口、先ほど白川先生からご紹介いただきました。場所っていうのはね、静岡県伊豆半島の東海岸に位置しております。そして、伊東市、下田市、この中間でございまして、東京からは本当に2時間ほどで来られますので、このコロナが収まりましたらば、ぜひとも皆さん方、この東伊豆町においでいただきまして、このすばらしい細野高原を見ていただけたら大変ありがたいと思います。

まず、私たちの町、全国的には珍しいんですけれども、6温泉郷から成り立っております。東京方面の大川地区、そして北川地区、熱川地区、片瀬地区、白田地区、これらが熱川地区と言います。熱川地区は一応5地区あります。そして稲取地区。全部で6温泉郷。稲取地区におきましては、4つの地区、東区、田町区、西区、入谷区が存在しています。細野高原の保全に関しましては、この稲取地区に細野高原がありますので、この稲取地区の4区の皆さん方にこの保全につきましてやっていただいております。この場にいますので、本当4区に厚く御礼申し上げたいと思います。

この町は気候も温暖で過ごしやすいです。この海と山に囲まれました、この豊かな自然、今回は皆さん方に東伊豆町に来ていただきまして、細野高原、そして

いゝる観光地を見ていただければ、町としては本当によかったんですけども、このコロナ禍では本当大変、自分自身はもう大変残念に感じております。

そういう中で、町の基幹産業は観光でありまして、以前は100万人以上の方が当町に来ておりましたけれども、今は本当、コロナ禍においてですけれども、減少しちゃいまして、今、去年で40万ぐらいですかね。早くこのコロナ禍が収まって、何とか経済を活性化していきたいと思います。

そういう観光以外には、やっぱりこの海、さっき言ったようにゼロメートルから1,400メートル、本当、傾斜がこういうふうにありますので、本当、海と山、これを全て満喫できますので、大変素晴らしいロケーションでございます。

そういう中で、農業、教育も盛んであります。まず、漁業におきましたはキンメダイ、こちらはもう地域ブランドになりまして、味はもう日本でございますので、ぜひとも皆さん方も稲取のキンメダイ、これを味わっていただきたいと思います。さらに伊勢海老も取れますし、結構豊富でございます。

さらに農業、これにおきまして、カーネーション、これはもう私も全国で一番ではないかと思ひます。基本的には農林水産大臣賞、これはもう過去3回も受賞しておりますので、この辺はもう自信を持って、また皆さんに進めていますし、さらにミカン、かんきつ類にはニューサマーオレンジがあります。やはりこれも香りも大変良く、これも東伊豆町の名産でございます。これまた季節がありますので、町が自慢できるものがありますので、四季を通じて、この東伊豆町、楽しめまして、よろしくお願ひします。さらにスポーツにおきましてダイビングとかゴルフ、そしてパラグライダー。このパラグライダー、今言った細野高原でできますので、ぜひとも海・山・空のスポーツ、年間を通じて楽しめる、本当に四季を通じて東伊豆町、大変素晴らしいところでございますので、ぜひともまたご来町願ひたいと思ひます。

このようなことが東伊豆町ではまちづくりの目標、これを満点の海・山・空は東伊豆と掲げております。この細野高原につきましても、このまちづくりの目標の一つでありますので、このパネルディスカッションにおきまして貴重なご意見をいただければ大変ありがたいと感じております。そういう中で、このあと稲取財産区の山田委員長から保全、さらには観光協会長のほうから、この利活用につきまして説明があると思ひますので、よろしくお願ひいたします。

私は細野高原の思い出というのは、やっぱり遠足でございます。当時小学生のとき、必ず遠足で細野高原に

行きました。そのときはやっぱり全学年で行きましたので、6年生が1年生の手を引いて行った思い出があります。そういう意味でもすばらしいなと。まだ子供でしたから、草原はすばらしいなというだけで、それがですね、やっぱり先代とその山焼きなどの苦勞によってこの山が守られていることを感じましたので、自分としてはこの子供たちが細野高原に子供たちが行く機会がないものですから、子供たちに細野高原のすばらしさを知ってもらった中で、さっき言った芸北の取組、これもまた後で聞きたいと思ひます。

そういう中で、やっぱり私は遠足といった中で、今度、富永さんとか言っていた、鹿、猪が増えた中で、ちょっとダニの問題が出てきました。しかし、スキのイベントをやっている中で、それに対しては十分対応しております。ある程度、受付において案内をして対応しておりますので。細野高原は安全ですばらしいところですから、よろしくお願ひいたします。

私の考えはそういうことでございますもんで、またよろしくお願ひいたしますと思ひます。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

今のお話の中にもいろいろと何か視点があるんだと思ひました。

ちょっと1つだけ、町長は地元出身なんですよ、この地区。

○パネリスト(太田長八) 僕は、今は結婚して熱川地区に住んでいますけれども、幼少期は、小さいときは稲取地区でございまして、稲取小学校に入りまして、やっぱり春と秋になると何しろその遠足が楽しみで、細野高原に対する思い出、それが大変強いです。

○コーディネーター(白川勝信) もう本当に地元なんですね。ありがとうございます。

次に、高橋佳孝さん、自己紹介と、ご自身と草原の関わりとか、高橋佳孝さんは東伊豆町の方ではないですが、今日は全国草原再生ネットワークの代表理事ということで参加いただいていますので、自己紹介からお願ひします。

○パネリスト(高橋佳孝) 皆さん、こんにちは。高橋でございます。

今、白川さんから紹介いただいたように、私は外者、よそ者で、細野高原とそんなに深い関わりがほとんどないのにここに登壇していいんだらうかというね。今日そこにいらっしゃる内山さんはまさに稲取のご出身で、草原に関する研究をされていると、まさにここは内山さんがいなきやいけな場所だと思うんです。いろいろと理由があつて、ここに出させてもらっています。

私と草原の関わりもということなんですが、私は福岡県の小倉市というところの出身です。当時、山々に行くと、植林地の防火帯として草原がいくつかあった。あれ面白いなと思って、むしろ焼けて大変だろうと思うんですけども、そこを2年に1回ぐらい、ずっと帯状に何キロも草原があって、そこが私の遊び場だったんですね。そういう原体験もあったり、あるいは南のほうで平尾台という有名なカルスト台地。秋吉台と同じように山焼きをやっている。やっぱり遠足に行ったり、遊びに行ったり。その原体験の下に草原に関わってきたわけですけども、一番のきっかけは、実は私の高校は修学旅行のない高校でして、いわゆる受験ばかりという、面白くない、非常に面白くない高校だったんですけども。ちょうど大阪万博の年、私が高校2年のとき、そのときだけ万博に修学旅行に行こうやという話が出て、そのときに山陰地方を何泊かして大阪までバスで移動したんですね。そのとき2日目に泊まった三瓶山という山がとてもきれいな草原があって、牛や馬が放牧されている。これは都会育ちの私にとってはすごい感激して、それをきっかけに畜産の道に興味を持ち、大学は農学部を選んだという経緯があるわけです。

そうこうしているうち、いろんな方と出会うことがあって、今回13回目を迎える全国草原サミットの第1回目から担当させていただいているんですね。そういう関係もあって、サミットのお手伝いをするような全国草原再生ネットワークというのを立ち上げた。

それと時期を同じくして、さっき最初に白川さんが紹介していただいた草原研究会、日本草原研究グループというのも立ち上げていただき、そのときに白川さんとあと二、三人の方で相談して、とにかく毎月1回、どこか草原を調査して、そこでディスカッションして回ってみようや、あるいは調査の手伝いをしようやと。そうやって中国地方を中心にいろんな草原を若い研究者を募って現場のフィールドを歩きながらぐるぐるぐるぐる回っていたという、そういうこともいろいろ重ねるうちに、今は阿蘇に携わって、草原再生協議会、阿蘇は約2万2,000

ヘクタールの牧野があって、山焼きをやっているのが1万6,000ヘクタールあります。その利用形態、極めて多様でして、土地所有も多様なんですけれども、利用面も畜産で利用されたり、カヤに利用されたり、あるいは草刈りをして堆肥として利用されたりとやっているんですが、大きな観光資源にもなっていて、阿蘇の。そういう意味では東伊豆とも共通したものがあるかもしれませんけれども。阿蘇においても、すごく担い手の問題というのも深刻で、これをどうするかということで、年間約2,300人のボランティアが山焼きや牧野体験に参加しているという仕組みづくりもちょっとやっているところです。

前回、この東伊豆でシンポジウムがあったときに、大きくそうですね、利用の面では観光利用、あるいはパラグライダーの利用というのが当時あって、新しい利用形態どうするかという模索もさせていただいた。それから、当時からやはり山焼きの担い手の問題というのはかなり深刻で、東伊豆町のほうでもボランティア等の関わりをどうやって考えていくかというようなことも論議したような記憶があります。

それから、さっきもお話があったように、教育とか普及の面で、子供たちをどうやって、昔は遠足で当たり前に行っていたし、地元の人たちの草原についての実感もあったし、誇りも多分あった。今はいろんな文化が増えているし、全体的にも様々ということで、いろんな問題を抱えているんだというような、そういう記憶をしております。この13年間でどういうふうに変わってきたのかなというのも今日いろいろお聞きしながら、課題の共有をできたら、いろいろ協力ができることがあろうかと思えますけれども。

1つ、稲取高原で面白いなと思ったのは、何年か前からやっている入山料ですね。草原をただで利用する人たちは、やっぱりちゃんとそれなりの対価を払って、ボランティアでいいから払ってくださいという、そういうふうな位置づけている。これはこれからの一つの観光行政の自然を守る形の一つの選択肢として、効果的ではあるけれども、画期的な出来事だったのかなという印象を持っております。

以上です。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

高橋さんは、僕はよくよく知っているんですけども、会場の方も知らない方も、それから、インターネットでご覧になっている方も、知らない方もおられると思うんです。先ほどあったように、日本の草原を本当にいろいろなところを見ている方です。草原に入って遭難したこともあるんでしたよね、たしか。そういう方ですが、町長か



らも遠足の印象が大きかった、高橋さんは三瓶山の印象が大きかった、やっぱり子供の頃の体験、大事なんだというのをお二人の今の自己紹介の中からも見ていきますけれども、じゃ次に山田さん、お願いします。

○パネリスト(山田賢一) 皆さん、どうもおはようございます。

私は、稲取地区特別財産区運営委員会の委員長をやらせていただいています山田と申します。

稲取地区の特別財産区というのは、稲取地区の区長さんとか区の役員さんの皆さんで構成されており、細野高原の管理や運営や、そういういろいろの事業を行っています。

財産区と言うとあれですけれども、昭和34年に、この東伊豆町というのは城東村と稲取町が合併してできました。そのときに稲取地区には230町歩ほどの当時の町有地があったわけです。その2分の1を今、稲取ゴルフ場やバイオパークに借地しております。残った部分はどうかということではいろいろ、細野高原を含めてどうかということでは話があって、平成3年に自治法が改正されて、稲取地区の4区に町から無償譲渡され、そのときにいろいろ4区で話し合っ、いろんな分配の問題とか、いろいろ話合いが出ましたけれども、この際、大同団結して、4区で平等でこの細野高原の責任を持って管理や運営をしていこうということで現在に至っております。

今、2分の1は、バイオパークとか稲取のゴルフ場とかに貸してありますけれども、そのうち借地料の2分の1は町に、2分の1を財産区の財源として使わせてもらっています。そのお金で細野高原の維持や管理、またこの各4区ありますので、各区にお金を分配して、各区の運営をやっていただいております。

財産区の細野高原の管理としては、防火線があり、そしてその後、防火線焼き、その後の全体の山焼き、そしてまた春の山菜狩りは、これは財産区としてやっております。そしてまた、各4か所ばかり湿原がありますけれども、湿原の周りの草刈りをやっております。そして、草原の中の道路が、結構道路がありますけれども、水とか雨とかで結構痛むもんで、その道路の補修や管理を行っています。

防火線焼き、山焼き、これは1回につき120名ぐらいの方に、区民に出させていただいております。この他の事業も含めて、先ほど白川さんのお話になった800万、13年前は800万ということで、現在は節約しまして500万ぐらいのお金で管理と運営をしています。

そのほか、観光協会の会長もおられますけれども、観光協会の秋のススキがこれから始まるわけですから



でも、ススキ狩りにも協力したりしております。また、各種団体で、先ほど言ったパラグライダーとかラジコンの会とかいうように、各種団体にも利用してもらうように貸出しをしています。

この頃ですけれども、この前もありましたが、映画やコマーシャルの撮影等に利用したいという希望がたくさん多くなってきて、それにも貸出しをして、一部の収入にさせていただいております。

今後の問題としては、防火線刈りもそうですけれども、焼き、山焼きこの作業員の高齢化というのが先ほど高橋先生の中にも、当時13年前にもあったと言いますが、現在はずっと深刻で、私は昭和24年生まれですけれども、大体中心になっているのは昭和20年代、30年代生まれの方が山焼きとか防火線焼きとかの中心になっていますので、非常に高齢化が進んでいます。それとまた産業構造の変化で、昔は、前にも言ったように農家の人が中心とかそういうことが主だったんですけれども、今は農業から観光やいろんなお勤めの方が増えて、当日の人員確保をするのに非常に苦労しております。

またもう一つ、一番これも大きなことかもしれません。先ほど町長のほうからもありました、原野や山に対する関心が非常に低くなっておりまして、そういうことも含めて原野を守っていくというのは非常に難しくなっているのが現実です。

また、私はよく冗談で言いますが、この細野には多くの絶滅危惧種があり、このことを、この絶滅危惧種を守っていくのが本当に大事なことだと思うし、またそれが我々の仕事だと思いますけれども、植物はあるんですけれども、その管理をしていく人のほうが絶滅危惧種の状態になっているというのが現実な問題です。昔は、原野は農家の資源や、要するに農家の堆肥とか何とかという資源や生活も今までのような茅葺きの生活の資材として必要な場所でありました。そのためにみんな非常に協力的で、いろんなことを一生懸命管理していただきましたけれども、正直いって時代の流れで、現

在ではあまり生活に必要と思われていないもので、いろんな考え方もあるでしょうけれども、自然を守るという哲学とか概念だけでは、どうしてもこれから守っていくのは非常に難しくなるんじゃないかなというのが私の考えです。だから、保全していくにはどうしたらいいかという、これから地域や町にどうしても必要な場所に、この細野高原を認知してもらうことが、認知していくことが重要なことじゃないかなと思います。

その中で、先ほど白川さんのお話の中で、非常に参考になりました。その一つとしては、あそこは水の水源地としてもやっていますけれども、もっと水源地を広げて、そこにいろんな花木などを植えて、植林して、それを観光に使ってもいいのかなと。もう一つは、先ほどから出ている教育の場として、体験学習とか、いろんなそういう子供たちの教育の場にも使えたら。もう一つは、観光資源として、自然利用のイベントとか、そういうものに積極的に使っていただければと思います。

財産区としても、そういうことが具体的にできたら、積極的に協力して前へ進めていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

今日はこの機会を利用して、皆さんのほうにも意見を聞かせていただきまして、参考にしたいと思います。ありがとうございます。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

本当に非常に大事な視点というか、たくさんありましたよね。植物を管理する人が絶滅危惧種だという話も、本当にいろんなところでも起こっていることでしょうし、ただ、管理する人がということが、発言が出ること自体が、まだ何かよくって、地域によっては、その植物が大事だということさえもひょっとしたらもう既に忘れられているかもしれない。

それから、もう一つのことが草原が必需品じゃなくなったという指摘の中で、守ろうという概念だけじゃ駄目で、具体的に何かやっていかないといけない。その中でも、やっぱりイベントとか観光というのが強いところ

なんだから、そこを進めていきたいというお話だったと思います。

ありがとうございます。また後から少し詳しくお聞きしたいと思います。

その観光とかイベントとかを中心的に担っていらっしゃる石島さん、続けてお願いします。

○パネリスト(石島専吉) それでは、改めましてこんにちは。東伊豆町観光協会の石島でございます。

お手元に、パワーポイントのほうに10ページになる、このジャンプしている、これは私じゃございませんけれども、もっと若い人なんで、こんなジャンプすると足を痛めちゃいますので。あと、今年の「澄んだ空気と絶景を。」という、このポスターにもあります、これがチラシですね。あとそのもう一つ、稲取細野高原の冊子、これを見ながら皆さんお聞きいただければと思います。よろしくお願ひいたします。

それでは、まず、細野高原と東伊豆町観光協会の取組についてということでお話しさせていただきたいと思っています。

次のページで、自己紹介ということで、私、石島専吉という名前なんですけれども、これは本当に私もずっと嫌だったんですけれども、やっぱり最近やっと慣れてきまして、これおじいさんの、祖父の名前をいきなりつけられました。子供の頃はすごく嫌で嫌でしょうがなかったんですけれども、やっとアラカンになってきて慣れてきましたけれども、私の父の出身というのが栃木県でございました。こちらに熱川温泉のほうに修行に出されて、そこで結婚して私が生まれたということで、今はその旅館を私も継ぎまして、熱川温泉のほうで「ふたりの湯宿湯花満開」というところで旅館もやっております。

私は2018年の東伊豆町観光協会に就任しまして、ただいま4年目で、2期目でございます。2020年、昨年、東伊豆町産業団体連絡会の会長に就任させていただきまして、現在に至っております。

この右側の写真は、毎年1回、三筋山まで歩いていますというふうに書いてありますけれども、これは去年の11月1日にちょうど第一駐車場の標高400メートルからこの三筋山山頂の821メートルまで、往復で大体7.5キロ、時間にして約2時間で歩きました。山頂では妻のお弁当というか、おにぎりを食べて、この小さく前にいるカップルも、ちゃんとお弁当を2つ持ってきて食べていました。その2人の歩くのが速くて速くて、本当、追いつくのが大変だったんですけれども、本当、軽装ですんなり歩き切っちゃいますね、若い人というのは。ですから、やっぱりそういうところも一つ面白いんじゃないかなと思いました。



次をお願いします。

細野高原を利用した東伊豆町観光協会の取組ということで、私たちにとっての細野高原とは～観光の観点から～ということで、東伊豆町、ひいては伊豆を代表する資源であるというふうに思っております。ですが、いまだ資源であり、目的となる場所ではない、こちらは財産区長もいるのに失礼なんですけれども、そういう状況が続いております。

ですから、また下を見ると、私たちが考える魅力ということで、圧倒的なスケール、これは町長もドーム26個分、箱根の仙石原が知名度が高いんですけれども、その7倍になります。ですから、もっともっと本当は来てほしいという状況でございます。

絶景ということで、草原の先には太平洋、そして伊豆大島がぼっこり浮かんでいるように見えます。そして、伊豆諸島も見えて、後ろには、私も中学のときに遠足で天城連山、万二郎、万三郎の遠足というのを8時間かけて行きまして、それは本当にもうつらくて、忘れられない思い出となりました。

そういう状況の中で、三筋山山頂というのが標高821メートルでございます。

次をお願いします。

その取組の2番になりますが、先ほども財産区長がおっしゃったように、春の山菜狩りというのは財産区が中心になって行われておりまして、私たち観光協会としては、パンフレットとかチラシを作って協力して、そして少し受付を手伝うという形になっておりますが、秋のスキのイベントに関しましては、東伊豆町観光協会が主催で行っております。ここで、細野高原でしか味わえない景色・体験を売りにしたイベントを企画・運営しているということで、こちらの詳細は次ページをお願いします。

ここで表が出てきたんですけれども、ちょうど白川先生がいらっしゃった13年前ということで、その後からこの細野高原のスキイベントが始まりました。ちょうど平成23年度から始まりまして、2011年かな。それで、今回の秋、これから10月8日から予定しておりますが、これが第11回になります。ですから、10年ぐらいやってきているんですが、私のイメージとしては、もっと20年以上やっているような気がしているんですけれども、こんなものなんです、まだ11回目ということで。

これさっき高橋先生もおっしゃっていたんですが、入山料を取るようになったのが第3回から。第3回の平成25年度から500円取るようにしました。そして、第5回の27年度から600円に上げました。来たお客さんは何か、何でこんなところでお金取るのよなんていう人も多

いんですけれども、一応そういう保全のために使わせていただきますと言うと、やっぱりちゃんと払っていただきます。

それで、第10回、昨年、第10回にはシャトルバスをやめたんですね。第一駐車場から、400メートルのところから山頂の手前の駐車場までのシャトルバスを回していたんですが、それをやめて、それがコロナでやっぱりバスの中が密になるということで、町の指導も受けましたので、それをやめて、昨年から300円にしました、シャトルバスなしで。中に入山していただいた後は、自分たちで頂上に行く方も、さっき言ったように2時間かけて行く方もいますし、その辺を散策して帰る方もいらっしゃるということで、そういう形にしておりますので、今年の予定も一応300円で、シャトルバスなしということで行おうと思っています。

このシャトルバスの運営だけで、この期間中、毎年大体300万ぐらいかかっているんですね。ですから、それをやらないことによって、足の不自由な方とか高齢の方とか、山頂まで行けなくて残念だったという話もあったんですけれども、意外とこの表を見ていただくように人数は増えているんですね、去年より。ですから、その辺で、今年ももう一回そういう形で挑戦しようということで今考えております。

その下の資料2は、これはもう財産区の方々が行われている山菜狩りの人数でございますので、細かく書いてありますけれども、大体このぐらいの人数で、大体25年ぐらい前からこの山菜狩りはやっておるということを聞いております。

その次で、細野高原を利用した東伊豆の観光協会の取組の3でございますね。

私たちの課題としては、目的となる場所へのブランディングや宣伝、イベントに依存しない観光地としての整備、特にソフト面、サービス面の企画ということで、やはりどうしても今までは花火大会などのイベントで、一過性なんですけれども、その日にがっと思集めて、もうお金をばっと思集めて集客するという形だったんですけれども、常に東伊豆というのは海があつて、高原があるということをもっと売っていきたいということで考えております。

この二、三年、コロナもそうなんですけれども、この二、三年、夏がすごい猛暑なんですね。ですから、海水浴には暑くて行かないというお客さんが夏は増えてきております。私も海の近くに旅館がありますので、夏になれば必ずお客さんが来て、海水浴に行くというふうに思っていたんですけれども、一昨年ぐらいのときというのは、暑いから行きませんという、海水浴に行ったお客さん、本当に数件だったんですね。目の前は海なんです。ちゃ

んと海はやっているのに、そういう状況です。

ですから、私の娘なんかも夏の旅行で昼神温泉の星を見にいったとか、やっぱりそういう高原を求めのお客さんが多くて、夏を涼しく過ごしたいというのものもあるのかもしれません。ですから、もっとこう海だけではなくて、この細野高原も売っていきたいということです。

現在の取組なんですけれども、昨年からちょうど財産区のほうも細野高原を考える会というのを立ち上げてあるそうで、私たちも年間活用委員会というのを発足しました。これは春と秋のイベントだけじゃなく、年間で細野高原を利活用する方向性として、ハイキングを掲げて整備や企画の立案を実施しています。このハイキングというのを、やっぱりただ普通に歩いてくれというんじゃないつまらないと思っていて、ハイキングの聖地づくりに取り組んでいるということで、今年の5月9日にはジオガイドつき、そしてキッチンカーも山頂まで用意して、そのプレツアーを実施しました。これは25名参加で、女性がすごく多かったんですけれども、それをやったりとか、先週の9月19日にはインフルエンサーを呼んで、招待してPRしていただいたり。今いろんな媒体に出すとかというよりも、そういうもうやっぱりインフルエンサーを呼んだほうがすごく効果があるんですね。これはいろんな広告もそうなんですけれども。ですから、そういうことを常にやっておりました。

あと、今年の10月17日にも、そのハイキングのガイドツアーを今、インターネットのほうで参加を募集しておりますので、またよろしくお願ひしたいと思ひます。

そんな形で、この右側にある写真も、これは夜の星空観賞。これも二、三年前のJRのデスティネーションキャンペーンのときに夜の星空観賞のツアーというのを5月と9月かな、そういうふうにしたときもございまして、そんなことになります。

じゃ次の。

活動とSDGsということで、SDGsって何なのかなというふうに私も思ったんですけれども、今やっていることがそういう保全の一部を担っているんじゃないかということで、こんな表を作成しました。東伊豆町観光協会としては、観光客、利用客から、先ほどの入山料を頂いて、それを財産区のほうに一部、これ本当に少なくとも、微力で申し訳ないんですけれども、大体20万から30万ぐらいですかね、毎回そんなぐらいで、一応頑張っけてやらせていただいております。

最後のですね。

本当に細野高原はこの町の宝でございまして。細野高原を生かしながらの利活用が観光業が主産業であるこの東伊豆町にとってとても大事だと考えております。

来年度、先ほど町長もおっしゃっていたような6つの温泉場が一つの東伊豆町観光協会に統合されるという、一本化事業というのもございまして、観光協会が一つになります。これによって、ここだけの話ということでもないんですけれども、稲取の細野高原というよりも、東伊豆町の細野高原というふうにしていきたいと思っております。みんなで、全町そろって細野高原をもっと頑張っけて利活用を考えて生きたというふうに思っております。

最後の資料なんですけれども、これは年間のいろいろな、財産区と観光協会のいろんなイベントがここにありますので、参考までご覧いただければと思います。

本日はよろしくお願ひします。

以上でございまして。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

先ほど高橋さんから前回の話題になっていたという話があった観光、それから担い手のうちの観光について、随分詳しく教えていただきました。ありがとうございます。特に金額とかですね、人数とか見させていただいたら、やっぱりさすがだなと思うのは、まずきちんとこういう数字が出ている上に、コロナ禍でも大きくは減らずに、むしろしっかりと継続が続いているというところが見えているというのがすごいなと思いました。

高橋さん、さっき今日聞きたいなとおっしゃっていたことのうちの観光の話が今報告があったんですけれども、聞いてみてどうですか。阿蘇のほうでも観光というのは大きな柱だとおっしゃっていたんですけれども、いろいろ、規模としては随分違うと思うんですけれども、比較しながら何か感想を教えてください。

○パネリスト(高橋佳孝) 私、観光専門じゃないです。ので、何とも言いかねるんですけれども。阿蘇の場合は地震の影響がかなりあってですね、それによって幹線道路が寸断されたりということで大きなダメージを受けたわけなんです。いまだもって、やはり草原の観光的な評価というのはすごい高いですね。前もお話したことがあるんです、来訪者に阿蘇の魅力を尋ねたときに一番魅力に感じたのは、やっぱり広い草原で、多分この国立公園に指定された頃は火山が一番人気でございましたと思うんですけれども。

○コーディネーター(白川勝信) 阿蘇の火山ですね。

○パネリスト(高橋佳孝) そうですね。火口が見えるとか、活火山であるとか、雄大さとかあると思うんですけれども、そういうふうによりモータリゼーションの関係で道路や交通機関がかなりこう発達してくると、広い草原の魅力というのは観光客にすごく大きいんだろうなとい

うのがあるんですが、阿蘇の場合は160ぐらいある、牧野という言い方をするんですけども、草原が160ぐらいあるというふうに考えてください、細野高原みたいな草原が。そういう世界の中で、観光についての新しい取組というのは、阿蘇はまだ畜産が盛んなので、防疫、伝染病が大きく広がることを一番恐れています。そのために牛がいるところに簡単に入れないような仕組みになっているんですが、牛がいなくてだとか、あるいはきちんと防疫、薬剤を散布したりあれしたりして、入る人も人を制限して、ちゃんとガイドつきで入るという仕組みをどんどん広げています。それで、さっきお話あったようにガイドで回った人は、そのうちの何人かを牧野組合のほうに渡しているという、そういう形で、大きくバスで歩いて、とにかくいっぱい動くというような世界ではなくて、そういった本当の草原のよさを学んで入って行って、そこのいろいろ、さっきからお話がかったように、自然だとか文化だとか、野焼きというのがこれだけ大変な作業で、こんなにきれいに守られているんですよということも一緒に含めてですね、ガイドさんとの会話の中でそういう会話をする。

将来的には、多分、牧野を管理している人の若い人がガイドになっていく、そんな仕組みづくりもこれからやっていこうかなというふうに、こういうところです。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

山田さんのさっきのお話を聞くと、随分、観光の分野と、すごくこう、どういえばいいんですかね、連携がよく取れているなというふうに感じたんですよ。何か阿蘇のほうは、やっぱり牧野ということで、牛を放牧しているんで、防疫ということで、しっかり消毒しないと、入ってもらって病気を媒介したら困るとかっていうことがあったんで、その辺では何か、あまり地域の方とかも観光客の人がたくさん来ることには全然抵抗がないというか、むしろ来てほしいというような感じなんですかね。

○パネリスト(山田賢一) 観光客の方が来てほしいというか、観光地ですから、そういうことは協力はしていかなければならないと思いますけれども、いろんなことのトラブル……、先ほどちょっと言ったけれども、今年はね、非常にオートバイの方が細野高原に入ってきて、物すごい大きな音で何十台って連なってくるもので、そういうことをこれから少し対策を考えなきゃならないかということは考えていますけれども、観光地である以上、多少はね、イノシシとか鹿しか歩かない道よりも、やっぱり人が歩いてくれたり、人がいることのほうが地元としてはありがたいもので、それはいろんな皆さんに注意をしてもらいながら、多くの方に来てもらうということは、それはいいと思います。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。ありがとうございます。

もう一つ、ちょっと山田さん、お尋ねしたいんですけども、利用の中で、観光のイベントとか利用が結構ご紹介いただいたんですが、何かほかの農業に草を利用するとか、そういうことは今はどういう状況なんですか。昔は、さっきあったというふうにおっしゃっていましたが。

○パネリスト(山田賢一) 昔はですね、もう今から、私たちが若い頃は、あの全山がほとんどはげ山になるぐらい、皆さんあそこで草を刈って、そして堆肥にしたり、畑の中へ引き込んだり、いろんな利用をしていました。ほとんど、だから、水際の下ぐらいからずっと、ほとんど草を刈り取ってしまひまして、見事なはげ山みになってしまっていました。昔はそれほどあったんですけども、今は数人の方が草を刈って資源にしているぐらいで、ほとんど草を刈る人は、非常に少なくなって、昔に比べればもう激減というか、ちょっと、というのがこちらの柑橘が主体だったんですけども、その産業が非常に衰退しちゃったもので、そういう意味もあると思います。

○コーディネーター(白川勝信) 柑橘の畑の中に、ミカン畑の中に草を入れていたということですね。

○パネリスト(山田賢一) はい、それがほとんど中心でやっておりました。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。その数人の方が今、すごく少ない数でやっているということで、あまりこう、使える草はたくさんあるけれども、草を使うことは随分減ってしまったということですかね。

○パネリスト(山田賢一) そうだと思います。昔はそれこそ部落中というか、皆さんで、私が若い頃もそうでしたけれども、取りっこというかな、朝の4時頃から草を刈りにいって、朝明るくなって、何だおまえらそこにいたのかというぐらいみんなで草を刈っていましたけれども、今はそういうことはほとんどないですね。草は幾らでもありますけれども、持っていく方は非常に少なくなっています。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。資源はあるけれども、使えていないということですよ。何かちょっともったいないなところなんです……、そう、皆さんの手元に質問用紙というのが用意されていると思います。話を聞きながら、アイデアとか意見があればぜひ書いていただければと。感想でもあれば。もし書かれた方は、ちょっと手を挙げていただくと、役場の山田さんが集めてくださるので、できればちょっと質問を書いてください。何か僕の聞きたいことばかり聞くのももったいないので、ぜひぜひちょっと皆さんのご意見と

感想とかもいただきたいと思います。

もう一つ、すみません、ちょっと先ほど聞いたときに落としちゃったんですけれども、今、4区の共有地みたいになっているんですよね。それは何年でしたかね、何年に話し合って、4区の共有にしようということになったんですって。

○パネリスト(山田賢一) 合併自体は昭和34年に合併したんですけれども、それをそれぞれ城東村が持っていた土地、稲取町が持っていた土地、稲取町が持っていた土地をどうするかということも議会の中でもいろいろ話しされて……、町長が発言します。

○コーディネーター(白川勝信) そうですね。いいですか、すみません。

○パネリスト(太田長八) 基本的には今言ったように町村合併のときに稲取の地区のこの細野高原について話し合いがありました。そのときは、やっぱり町が一枚かんで、町と4区の共有の土地で、さっき言ったように、ゴルフ場、そしてアニマルキングダム、動物園、これに関しては2分の1。今もその分配は変えませんが、使用に関しては、私がなって多分すぐくらい、結構4区からそういう要望があった中で、4区の所有だったのが10年くらい前かな。そのぐらいですよ。

○コーディネーター(白川勝信) 10年前ぐらいですか。

○パネリスト(太田長八) 大体ね。

○コーディネーター(白川勝信) そうですか。

だから、あれですよ。昭和の合併のときにそういう話し合いがまずあって、最近というか、10年前ぐらいにもう一度、そこの所有を見直すというか、そういう流れがあったわけですね。

○パネリスト(太田長八) 結構ね、4区のほうから、もう前から一応、4区の所有にしてくれといった中で、話し合いがあったんで、役場も巻き込んでそうなったと感じております、あと4区の強い希望ですね。

○コーディネーター(白川勝信) 昭和33年頃といったら、草の利用はどうだったんですかね。柑橘って割とずっと何ていうか、堅調な産業だったのかなと想像するんですけれども。

○パネリスト(山田賢一) その合併する日が来たら、しばらくの間は、今も町長の話の中にもありましたが、ゴルフ場とかバイオパークも含めて、草刈り場、採草地だったんです。そこを正直いって、今4区と言いますが、昔はほとんど一つの入谷区と言うんですけれども、そこが全員ほとんど出て、それで全部で言う200何十町歩を自分ちで管理しておりました、合併した頃、前後ですね。そういうことでやっていまして、ここの入谷区というところの人はほとんど全戸出て管理をして、

防火線から山焼きからやっていました。山焼きなんかは、ひどいこと、今じゃ考えられませんが、朝振れというのがありまして、朝6時頃、班長さんが今日は山焼きやるから出て来いと言って、それは有無もなく出なきゃならないような状況でやっていました。今日の仕事があるとか予定なんていうのは、それはもう無視されて、そういうことで皆さんで、入谷の皆さんが管理してきたものです。

○コーディネーター(白川勝信) その頃の人の意識と随分今と違うんでしょうね。何かその地域の行事というか、もうやるのが決まっている。もう年中行事みたいな。

○パネリスト(山田賢一) だから、先ほど言ったように、あまり利用しなくなった、農家でも使っていた人があまり利用しなくなったというのがやっぱり一番大きな、大きな関心がなくなってきたということじゃないかと私は思います。今でもよく共同で山焼きの管理をしていたいていすけれども、この役員以外の方の中には、何で俺んちが山の管理をしなきゃならないんだ。海岸線のそれこそ近くとか、町の中の人には、そう言われることも多々あります。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。そういう意味では、あれですよ。前回の、前回って、13年前のことを言うのもあれなんですけれども、課題だった山の価値を共有しないと担い手もまた続かないかもねというところは、まだまだ今もちょっと課題としてあるのかもしれないですね。ありがとうございます。

そんな中で、さっきバイクの、モトクロスの人が増えてきたという話があったんですけれども、ちょっと質問をいただいています、バイクも問題があると思います。マウンテンバイク、モトクロスの人の利用はどうですかということで、お聞きしたいことというのは、草原管理の立場とか観光の立場からメリット、デメリットなんで、観光の立場のほうからちょっと、石島さん、バイクとかモトクロスの人たちの観光の仕方というのはどうなんですかね。うちのほうを見ても、ツーリングでやって来て、ちょっと休憩して、また次のところにずっと行くような感じで、何か通り抜ける形の、モトクロスじゃないので、ツーリングバイクはうちのほうもよく来るんですけれども、モトクロスというのは林道を走っている感じなんです、未整備の。どんな感じで。

○パネリスト(石島専吉) 私もそのあまり詳しくはないですけども、財産委員長が言われたのは、駐車場、その第一駐車場、第二駐車場ぐらいまで来て、山を見て、いいところだねって言って休憩して帰るんだっただいいんですけどもね、その400メートル以上の上の、細野高原の山頂近くの三筋山の近くまで林道がずっとあ

るわけですよ、狭い。そこをがらがん走っているらしいんですよ。ですから、そこからまた転がり落ちちゃったりとか、いろいろそういう事故にもつながっているみたいなんで、今ちょっと苦慮されていて、入り口にちょっとチェーンでもやって、それは取って行けることは行けるんですけども、もう少し意識をしっかり持たせたほうが、何かね、よくないんじゃないかということもあって。そういうことは山田さんからこの間言われて、そうだなというふうに思いました。

○コーディネーター(白川勝信) 確かに事故があったりすると。

○パネリスト(石島専吉) そうですね。やっぱり私たちの考えるハイキングの聖地と、そういうバイクとかっていうのは、ちょっとリンクしないんですね。ハイキングで歩いているところをばんばんこう上っていつちゃうらしいんですよ。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。

○パネリスト(石島専吉) ですから、ちょっとその辺は規制しないとまずいんじゃないかなというふうには思います。

○コーディネーター(白川勝信) その辺を規制する道、そこは市道なんですかね、町長。そうですか、市道ですか。どういう形の規制が考えられますかね。

○パネリスト(太田長八) 基本的に町道が抜けているんですよ。その町道に関して遊歩道が続いているので、そういう部分に関しましても私道なので、それはすぐにできると思っています。町道に関しましては制限できません。やっぱり一番心配するのがこの細野高原、住宅地を通ってくるもんで、渋滞とか住民の理解がないと活用できませんのでね、それなので今、細野高原付近の住宅の理解を得られるようやっております。それこそ今度はバイクなど、これ規制できませんもんでね、そういうなかで細野高原の活用がちょっと中座するのが困るなというのが現状でございます。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。ありがとうございます。

マウンテンバイクとかで来る人はいるんですか。うちのほうはスキー場があるんで、スキー場の夏のシーズンにマウンテンバイクでだっと下るとか、林道を下るとか。自転車ですよ。自転車あまりないですか。

○パネリスト(山田賢一) ないと思うよ。

○パネリスト(太田長八) 自分が把握したのは、熱川地区はね、比較的林道があるもんで、熱川地区が結構マウンテンバイクが来ているのは聞いていますけれども、細野高原に関しては、ちょっとマウンテンバイク、普通のオートバイが結構来るんじゃないかと、これは想像です。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。ありがとうございます。

ちょっとまた別の質問なんですけれども、そういう意味で、これまであった自然イベント、自然利用で、何か細野高原に合っているものというのは山菜狩りとかススキ狩り以外でどんなのが、どんなイベントがいいかなという質問が来ているんですけども、どういう方向性が……

○パネリスト(太田長八) 正直いって星空やったんですよ。星空のほうも、自分はもう最高でした。やっぱり行ったときに、もうライトも全て消して、虫の音だけ聞くような感じで、たまたま虫の声が聞こえて、本当にすばらしいなと思ったんですよ。しかしながら、やっぱり寒さ、これが寒いということで、2回やってちょっと断念したんですけども。そうやった中で、星空のこと、これもある程度やったら本当、都会の人も喜ぶんじゃないかと思っています。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。ありがとうございます。

ほかに何かアイデアがありますか。山田さんとか石島さんのほうは。どんなイベントがいいなというのがあれば。

○パネリスト(山田賢一) 要するに今、私が考えているというか、皆さんにも細野高原を考える会の中にちょっと提案させています。要するに細野高原の里山づくりという形で、奥山じゃなくて、あそこはまだ里山だよという形で、里山のよさを広げていきたいなと。そういうことで今、細野高原の入り口、これは財産区の土地じゃないんですけども、やっぱり入谷部落の振興会という昔の団体がありまして、その土地が6町歩ぐらいありまして、ほとんど細野高原に隣接したところですけども、そこを今、森林組合の組合の皆さんが今まで植林されていたもんで、そこを全部伐採して、そこに今、ヤマザクラを全部植えようかなんていうことで、ヤマザクラの里を今、これは国とか県の補助金をもらって森林組合がやってくれているんですけども。それで、地主さんは振興会というところですけども、将来的にはそこをヤマザクラの里にしようと。中は当然、材を出すのに林道を造りましたんで、そこが散策道路になるかなと。そこが、うちの振興会の山だけが6ヘクタールぐらいならあるんですけども、その奥に町の山も10町歩近く、10ヘクタールぐらいあるもんで、今、町長ともお願いしているんですけども、そこ全体を全部やって、いろんなことに使えないかな。そうすれば、振興会のほうもいろんなことがあるんじゃないか、できるんじゃないかと。

農協さんもいろいろそこを今、あそこにも農協の施設

もありますから、これはボツになったんですけれども、一時、あそこで、要するに地ビールの工場を造ってやりたいという、いいな、地ビール、ビール飲みながらあの高原でススキ眺めたらいいなというようなことで、それを私たちも非常に賛成して協力したんですけれども、ちょっといろんな事情で、それはボツになりましたけれども。

そういういろんなことで、あの高原をいろんな方面で楽しんでもらえるような、これから設備というか、利用している団体とか企業があったらいいな、私は考えています。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

何かいろんなことが、道路がやっぱり中まで通っているというのがいろいろ、シャトルバスが行けるようなとか、そういう整備ができていっているというのがすごいんだろうなと思います。

片方でちょっと管理のほうの質問も来ているんですけれども、担い手の問題というのも先ほどありましたが、もう一つ、省力化という関係で、これ僕の話の中なんでしょうね、山焼きの道路の防火帯に沿って軽トラが入れるようにするような話が蒜山でも聞いたことがあるけれども、細野高原でも何かそういうことができる部分があったらコメントをお願いしますということなんですけれども、これどなた……、そういうのが可能そうなところというのはあるんですかね。

○パネリスト(山田賢一) 防火帯、先ほど今、白川先生の言った、あその防火線沿いにパイプを引くかという案も去年出ました。

○コーディネーター(白川勝信) そうですか。やっぱり一晩で考えるようなら大体考えているんですね。

○パネリスト(山田賢一) やって、水道屋さんに見積りを取らせてやってみてはどうかと思ったら、距離が長過ぎてちょっとそのままやるんじゃ難しくないかということで、それはボツになりました。

もう一つ、今、いろんな林業試験場とかなんとかでお話を聞いているのは、内山さんが専門ですけれども、あの防火線に防火林を植えて、要するに火の広がらないような防火林を植えて、それがただの面白くない木じゃ、何も観光資源になりませんから、将来的に防火林でありながら観光資源の一助になれるような、例えばいいんじゃないかって、内山さんが専門ですけれども、サザンカとかツバキとか、一番強いのはサンゴジュなんているのがあるらしいんですけれども。それらを防火帯に10メートルぐらい、本当の火が出るところじゃなくて、火があまりばんと燃えないようなところは防火林で防火帯みたいなものを設置したらどうかというようなことも

皆さんとは議論していますけれども、まだ実現はしていません。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。

やっぱり結論というか、ちょっとすぐには出ないんでしょうね。どこの地域でもいろいろそういう山焼きの省力化とか安全性というのは出されているんですけれども、高橋さん、何かその辺で、阿蘇のほうでは物すごいたくさんさんの山焼きやっていますし、工夫されている部分もあると思うんですけれども、人数も多いですが。ちょっとどういう、事故のほうの部分ですし、省力化の工夫で何かあれば教えてもらえますか。

○パネリスト(高橋佳孝) やっぱり事故は、毎年とは言わないけれども、数年に1回必ず出ているんですね。事故が起きると、もうやめてしまうという、そういう一つ大きな問題が2つあって、1つはもう担い手がいなくて、いつやめるかを考えず、ただやめてしまう。責任者が責任を取るなんて無理。例えば阿蘇の場合では、区長さんが火入れの責任者。

○コーディネーター(白川勝信) 火入れ責任者。

○パネリスト(高橋佳孝) であれば、区長さんというのは、例えば2年、3年で替わっていきますよね。そうすると、もう区長になりたくないという人が出てくるんですよ。しかも、それ裁判ざたになったりとか、いろいろ面倒くさいというのがあって、それで、多分この阿蘇の分科会で相談される南阿蘇の村長さんがいて、南阿蘇村は地震による被害によって野焼きができなくなったところが多いけれども、もともとそういう構造的な問題で、いつもどうなるか分からないというから、どんどんやめる、やめる、やめるというのが出てきていたんですね。そこで少なくとも火入れ責任者は首長になるということで、実は安心して野焼きを再開した牧野参加者。ただ、それはもちろん責任者だけの問題じゃなくて、そこに県や、あるいはボランティアや市町村の協議会みたいなものをつくってみんなで応援してそこを再開するわけです。なぜ再開するかというのは、これも多分、分科会で論議されるように、熊本市民にとっては水源の源である草原の水源涵養力というのは、実は阿蘇のほうは森林よりはるかに高いんです。もしかしたら東伊豆もそうかもしれない。そういう草原の価値をみんなで共有して、それを守っていくために役所も汗をかくし、お金も出しましょうということでやっている例が1つあります。

もう一つは、牧野ごとに、さっき白川さんがおっしゃったように車が通れる防火帯をやっぱり造りたいというのが物すごく強いみたいですね。鉄鋼スラグの廃材みたいなものが簡易的にですね、舗装までいなくてもかなり強い道が造れるということがあって、そういうものを

導入することで、野焼きを再開したり、そういう、向こうでは恒久防火帯という言い方をするんですけども。

○コーディネーター(白川勝信) 恒久、ああずっと使えるもの。

○パネリスト(高橋佳孝) そうです、ずっと使える防火帯。道路さえあれば何とかかなる。そういうものに対しても県の事業として、導入するところにはそういう必要な経費を出すというふうなこともできています。

やっぱり今の方向性としては、恒久防火帯ですね。

もう一つは、以前、草を刈っていて、もう裸になるような状態がありました。阿蘇も秋吉台も全くそういう状態ですね。その頃はですね、こんなに広く防火帯を切らなくても安全だったんですよ。草がもう持ち出されているから、火をつけてもそんなに大きくならない。今は雄大でもう映像に入るとものすごくいいように見えるかもしれないけれども、まさに危険な状態にあるわけですね。25メートルぐらいまで炎が上がったりします。そんなに危ないんじゃない、もう野焼きができないという話があったんですが、最近、カヤ刈りとして、冬場の枯れた草をいろいろな方が刈っているんですよ。牧野さんにもお願いをして、そこに入らせていただいて、たくさん刈るように。牧野さんがそれで一番喜んだのは、野焼きが楽になるって。もともとあの草原の価値があって、それを維持しようとするのも重要ではあるんですけども、実は、それを維持するためには草をうまく利用することがそれにもまた役に立っている。もちろんお金という点もあるかもしれないし、材として文化財の保全に役立ったりすることもあるかもしれないけれども、利用することで、実は管理の省略化や安全性にも物すごく貢献できているという、そういう仕組みづくりをみんなで共有していったら、やっぱり何か草を利用する算段と創意工夫によってひとつひとつやっていかれたらいいと思います。

○コーディネーター(白川勝信) そもそも利用していたから草原なのであってというところに立ち返ることですね。

ちょっと会場からの草の利用についての質問、多分、山田さんにお答えいただいたらいいと思うんですけども、1つはミカン畑に草を使っていたときは何月ぐらいに使っていたんですかということなんですけれども、刈る時期というのは、決まった時期に刈っていたんですか。

○パネリスト(山田賢一) 刈る時期は、10月から11月、要するにこれから秋口にかけて、もうカヤが緑がなくなってきた、要するにそのほうがもちがいいもんで、青い草を刈ってやるよりも。だから、皆さん大体、草が枯れ始めた頃から、10月から11月頃から。それで、して、

少なくとも2月に山焼きをやるもんで、山焼きのときまでには、刈った草は持ち出してくださいよというようなことでやっていました。

だから、そうですね、大体今から、10月から11月頃が一番多いと思います。

○コーディネーター(白川勝信) それと、かやぶき屋根には使っていたんですか。

○パネリスト(山田賢一) 僕の記憶というか、前は使っていたという話も聞きますけれども、実際、私は見ていないもんで、何とも言えません。使っていたと思いますよ。

○コーディネーター(白川勝信) そうですね。使っていたとしても、大分昔、古い時期ということですね。なるほど。ありがとうございます。

ちょっと別のユーチューブのほうからの質問、すごいいっぱい来ています。何か皆さんやっぱり、これはですね、シャトルバスのほうなんで、石島さんにお伺いしたいんですけども、シャトルバスをやめたのに料金を取っているのはどこで取っているんですか、どういうふうに徴収している、徴収方法を教えてくださいませんかというんですけども、それは何かゲートを設けたりとか、そういうことですか。

○パネリスト(石島専吉) そうです。下の103台置ける駐車場の入り口のところに受付がございまして、そこで一応、感染症対策でいろいろアルコールをやったりとか、そういうときに払っていただいてパンフレットを渡しています。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。コロナ対策も一緒にできるしということですね。

○パネリスト(石島専吉) はい。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

そのやり方というのは、割と最初の頃からそういう形でやっていたんですか。

○パネリスト(石島専吉) そうです。その期間だけなんですけれども、ですから、1日過ぎれば無料で入れちゃうんですね。ですから、最初は私も何でお金取るんだよってものすごい言われているようなお客が多かったんですけども、やっぱり最初はそういうふうに、高橋さんが言っていたように、入山料って何で取るのっていうのを、無料のイベントというのはよくないという前任の観光協会長から言われていて、そちらの前任の観光協会長がそういうふうにして、私たちもそれを引き継いでいます。それを財産区のほうにも使用料として払えるという形になっております。

○コーディネーター(白川勝信) 町長、何か。

○パネリスト(太田長八) 入山料に関しては、やっぱ

り保全という中で、首都圏から来る人が結構多いので、500円、それくらいのお金ですけれども、地元の人にとっては500円高いなと言いますけれども、首都圏から来れば取りあえずそれが妥当ではないか。しかし、やっぱり行くまでは結構ブーブー、周りを見ますと、現地に行きますと、やっぱりすばらしい景色を見た中で、それは当然当たり前の話だということを聞きますので、町としてはそれがいいんじゃないかと確認しております。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。お願いします。

○パネリスト(山田賢一) 入山料の話をしたら、先ほど言った、今ススキがあるだけじゃなくて、今年、去年はコロナのことでやらなかったんですけども、山菜狩りでも、私たち財産区で、入り口のところでお金を頂いています。あそこの入り口のところで来て、町民の方とよそから来た人はちょっと金額を変えて頂いております。

○コーディネーター(白川勝信) 細かい対応をしているんですね。

○パネリスト(山田賢一) そうですね。それはいろんな観光協会さんのご指導でいろいろやっていまして、町外の方とか宿泊した方、地元の方ということで、3段階ぐらいに値段を分けてやって、財産区の役員があそこでガードしてやっております。

○コーディネーター(白川勝信) なかなか結構ね、お金を頂くというのは勇気の要ることで、お金出したけれども、こんなかってなっちゃう……

○パネリスト(山田賢一) 文句が出ますけれども、これは富士山のあれと一緒に、この山も管理するお金ですからということで頂いています。

○コーディネーター(白川勝信) そういう意味じゃ、草原の価値を知っていないと、お金下さいとは言えないわけですから、それだけ価値を認識しているということですよ、地域の皆さんが。

○パネリスト(山田賢一) 何回かは、あそこまで来て、ゲートのところで帰っていく方も結構います。

○コーディネーター(白川勝信) なるほど。帰っていく方もおられるんですね。

草原の価値という中で、さっきちょっと質問とかを後に、教育のことについて、町長もおっしゃったし、高橋さんもおっしゃっていたんですが、幾つか質問が来ているんですけども、まず、高橋さんに、全体的なことだと思えるんですけども、草原の価値の教育的効果についてのことの質問で、草原で子供たちに何を伝えられるのかということ、火入れとか野焼きを体験すること、伝統的な作業としてそういうことを体験することの意義みたいなところは、大きな話ですけども、どういうところ

にあると思いますかという質問なんです。

○パネリスト(高橋佳孝) 草原、教育者じゃないんで、偉そうに語ることはできないんですけども、価値と言うまでもなく、大きく2つあると。1つは体験、五感で体験したり、野焼きを体験したり、自然の雰囲気や体験したり、草花を観察したりということと、それからやっぱり仕組みづくりを学ぶというところですね、文化も含めてですね。体験に関しては、学校の中では語れないし、教えることができないことが屋外でできる。

阿蘇の場合、全部の小学校で草原の学習をすることが今できています。それで、発展性というか、私たちもそのほうがいいなと思ったのは、それを端緒にして、今度はそれが公民館活動に地域活動にいく。そうすると、地域の関わってくれる人たち、大人の人たちも増えていくし、景観も入ってくるし、公民館として地域の草原を守ったり、上で寒いんですが、阿蘇の場合、草泊まりという、草刈りをして、地元の集落と草刈り場の集落まで500メートル以上の標高差があつて、毎日通うの大変だから、家族みんなで山の上に行つて、草で作ったテントで2週間ぐらい泊まって草刈りするという文化があつたんですけども、その中で子供たちを泊まらせて体験させたりというようなこともできている。

だから、端緒は学校教育からだったんだけど、今は地域教育というか、教育という言い方がいいのか悪いのか分からないんだけど、地域の文化や歴史や、その成り立ちや技術や意識や知識というものです、子供たちに引き継いでいくと同時に、家族やその関わる人たちにも広がっていくというものがいいですね。少しずつ何か所かに広がっていく。そのほうが私は大事になってくかなと思います。

○コーディネーター(白川勝信) SDGsの地域版というか、そういうこと……

○パネリスト(高橋佳孝) そうですね。そんな感じになるのがいいと思います。

○コーディネーター(白川勝信) 先ほど石島さんから、最後のスライドでSDGsという言葉があつたんですけども、観光コンテンツそのものとしてのSDGsとか、そういう学習のニーズというものはあるんですかね。SDGsを学ぼうとか、そういう草原の自然、先ほどでの説明だと、観光での収入が草原の保全に行くということだったんですけども、阿蘇ではボランティアの人は年間2,000人以上来るし、実はうちのほうも木を切ったりとか草刈りの体験を教育ツアーとして、一応プログラムというものはあるんですけども、そういうのは、こちらのほうではそういうニーズみたいなものというものはあるものですか。

○パネリスト(石島専吉) 細野高原はまだそういう形にはなっていないんですけれども、いろいろ摘果のミカンの収穫を手伝うとか、いろいろそういうカーネーションの花を、そのまま結局時期が過ぎちゃって、全部それを捨てちゃうわけですね。そういうのを何か手伝う体験だとか、そういうことは、農業体験のほうなんですけれども、そういうのは少しずつプログラムに入れているんです。まだ参加者は少ないんですけれども。

○コーディネーター(白川勝信) そうなんですか。

○パネリスト(石島専吉) そういうのは年間を通していろいろちょこちょこやっています。

○コーディネーター(白川勝信) じゃ何か、これだけ宿泊施設もあり、こういう海と山とっていう、すごく近いところにあるという環境だったら、本当に、うちは体験教育とかをすごく受け入れているので、何かメニューがつっこんでいきそうだなと感じました。すみません、ちょっと僕の興味のほうでちょっと質問をかぶせてしまったんですが。

もう一方、これも教育のことなんですけれども、次世代に伝えていくために教育現場でできること、望むことはどういうことがありますか。町長のほうから遠足の記憶がっていう、高橋さんもそうだったんですけれども、遠足以外でということというのですが、教育現場でどういうことができるでしょうかね。どなたでもお答えください、せっかくだから。どなたかありますか。

○パネリスト(太田長八) まず、自分から言ったのは、まず細野高原に対しての愛着ね。子供のときから。それがなければ、細野高原の保全はもう無理だと考えております。そういう中で、まず町民が行った中で、細野高原のよさが分かった中で、そしてやっていけば続ける方向で、地域効果やったんです。それによってよさが分かって、そうすれば、先生が言ったように子供が行けば、必ず父兄が行きます。そういう中で全体的にやっていきたい。それとやっぱり子供たちも自分で働いたお金でいろんなことができる。そういうことができれば、子供たちの教育になると考えております。

そういう長期的に考える中で、やっぱり子供が細野高原に興味を持たせなければ、自分は細野高原の保全は絶対無理だと考えておりますので、そういう中で、そこが一つのいい機会じゃないかというようなことです。

教育的効果、高橋先生がおっしゃったtentを作ってそこに滞在する、そこでキャンプするとかね、やっぱりそういうのがあると、教育的な体験になるんじゃないかと考えています。

何しろ小さい子が草原に対して興味をいかに持たせるか。それだけは私はいろいろと考えております。やっ

ぱり何事も一から小さい時からやっていくというふうにありますので、そこからの教育が私は一番大事じゃないかと考えておりますので、そういうふうに言わせていただきました。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。ほかにありますか。

ちょっとそろそろ時間が来ているんですが、いろんな方の質問、本当にありがとうございます。

もう1個だけ、僕に質問、これは物的なことなんで、カヤが高いという話が出て、850円で売るのは高いんじゃないかという……

○会場より (「いや、違う、どうしたら高くできるかということを知りたかった」と呼ぶ者あり)

○コーディネーター(白川勝信) それはなぜですかということなんです、これは、中間業者に販売しているんじゃないくて、カヤの施主さんに直接販売しているので、一旦集めると安くなりますけれども、カヤぶき職人さんとかカヤの施主さんとしっかりネットワークをつくるのが高い価格で販売している一つかなと思います。価格についてはカヤぶき職人さんに相談して決めた価格ですね。すみません、以上です。

いろいろお聞きしたんですが、ちょっと最後に皆さんから一言ずつ、草原に関わる人への誰かを想定して、子供でもいいですし、観光客の人でもいいですし、また、ユーチューブで見えたらいい方でもいいですし、一言ずつメッセージをいただけたらと思います。石島さんから、今度は反対をお願いします。

○パネリスト(石島専吉) 4人目だと思って安心していたんですが、私は観光ということからちょっとお話をさせていただければ、何で秋のススキなんだという感じなんですよ。これはもう10年ぐらい前から団体の宴会型のお客さんが激減しています。今まではもう団体でバスで来て、もう20人、30人で宴会して、朝ばつと8時頃帰っちゃうんですね、もう朝食を食べて。ですから、観光する場所なんていうのは全く必要なかったんです。秋以外の春には河津桜もこうやってやっておりますし、夏はやはり海水浴とか、そういうリゾートという感じがありますのでよかったんですけれども、それなもので、秋が全然オフシーズンになっちゃったんですね、一時期。それで、やっぱり観光協会のほうも、せっかくああい高原のいい場所があるんだから、ススキのイベントをやらせてくださいということで、財産区に頼んで町と協力してやったような状況がございますので、そのような形で、やはり春夏秋と楽しめる、そういうコンテンツが欲しかったということがまず1つですね。

ですから、秋によくお客さんに言われたのは、伊豆の

秋って紅葉するところあるのかいって言われて、昔はもう強気でしたから、もう団体客ばんばん入ってくるから、じゃ結構ですよ、もうどこかの箱根とか北関東とか東北で見てくださいと、紅葉は。伊豆はちょっとないんで結構ですみたいな感じだったんですけども、今は反対ですから。紅葉する木はないんですけども、やっぱりそういうススキで秋を楽しんでほしいというのが1つです。

あともう一つだけ、去年のススキのイベントで7,200人来たわけですけども、そのうちの350人にアンケートを取ったんですね。さっきの話とちょっとつながるかもしれないんですけども、イベントの売りで何が一番よかったですかというのは、やっぱり「絶景」でした。これ断トツで絶景。それで、参加したい新企画、これは多かったのが「1日限りの星降るキャンプ場」、あと、「大自然をそのままに」という方もありますし、あと、「野外コンサート」。これは今年ではできないんですけども、一昨年まではホルンの演奏会だとか、稲取高校の吹奏楽部の演奏会を土日にやったりとかしておりましたので、そういうことです。あと、細野高原に必要な施策ということで、「アクセス道路の拡充」とか「絶景ポイントの紹介の充実」とか、そういうことを書かれている方が多かったということですね。

ですから、伊豆というのは本当に秋も楽しめるんだということを観光客の皆さんにも知ってほしいということでございます。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。秋を楽しんでほしいという、観光客の方へのメッセージ。

山田さん、お願いします。

○パネリスト(山田賢一) 管理していくのがどういうことかということを言われてもあれですけども、私はよく親戚とか友達とかなんとか来たときに、細野高原を連れていくと、必ず言われるのは、何だ伊豆は山が深いんだな、よく言われます。大体皆さんは海岸だけ走って帰ってきて、伊豆半島の中のほうへ入るのは、天城道路ぐらいのところしかないと思いますけれども、各町には深い山が、山が深いです。だから、そういうことを楽しみながらいろいろ山を楽しんでいただければありがたいなと思います。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

すみません、ちょっとチャイムが鳴っちゃって、時間が来ちゃったんですけども、コンパクトに高橋さんと町長にもコメントいただいて終わりたいと思います。

○パネリスト(高橋佳孝) 草原は非常に懐の深い資源だと思います。それで、将来に向けて決して暗いことばかりじゃなくて、多分21世紀の持続的社會を語る、これほど人と自然との関わりの仕組みが何千年も続いて

いるというのは、すごい懐の深い地域資源なんだろうという。ただ、それを私たちが気づいていないような、これは研究者にもしかりだと思ひ、行政においても多分しかりだと思ひますけれども、そういう意味では、もう一度、草や草原の魅力をみんなていろいろ創意工夫しながら考えていく。新しい社會への土植えも可能になってくる、そういう明るい展望を持ってみんなてぜひ協力し合って次の世代にちゃんと続いていくようにしたいなと思ひます。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

じゃ最後に町長、お願いします。

○パネリスト(太田長八) これは本当、ユーチューブを見ている全ての方に、これはもう人と地域の問題じゃありません。これは全国の問題でございますので、全国の方々、草原に対して興味を持っていただくことが私は一番だと考えています。そういう中でこの草原、将来にわたって保全なんかもね、やっぱり市町村の自治体で連携してより多くの自治体に入ってもらった中で、草原をいかに守っていくか、これをまたやっていきたいと思ひます。そういう中ではまたユーチューブを見ている方、その辺また支援と協力を賜ると大変ありがたいと思ひますんで、よろしくお願いします。

○コーディネーター(白川勝信) ありがとうございます。

最後に非常に力強い、全国の方々、それから全国の自治体に向けて草原共有を持ってまた加わっていただきたいというメッセージをいただきました。

ちょっと僕の進行が不手際で12時を過ぎてしまいましたが、これでパネルディスカッションを終わりたいと思ひます。

もう一度、4人のパネリストの方に感謝して拍手をいただけたらと思ひます。(拍手)

どうもありがとうございました。

じゃ、配信のほうもこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会 皆さん、どうもありがとうございました。

午後ですが、1時から東伊豆、阿蘇、蒜山の3会場で分科会を開催いたします。午後1時になりましたら、それぞれの会場で分科会を開始してください。よろしくお願ひいたします。

その後の全体会のウェブ配信については、午後3時20分からを予定しておりますので、午後も引き続きよろしくお願ひいたします。

午前の部につきましては、以上で終了となります。ありがとうございました。

第13回 全国草原シンポジウム in 東伊豆

■ 分科会 東伊豆会場

「利用・保全・継承」

○司会 それでは、ただいまより東伊豆会場の分科会のほうを始めさせていただきます。

ここからの分科会の進行については、地域おこし協力隊の藤田翔さんと実行委員の内山義政さんをお願いをします。また、パネラーとして入谷区町内会長の鈴木豊美様に御協力をいただきます。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

○地域おこし協力隊(藤田 翔) 地域おこし協力隊の藤田と申します。本日はよろしくお願いいたします。

最初に、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、簡単に自己紹介をさせていただきます。

地域おこし協力隊の藤田翔と言います。東伊豆町に来て今年で3年目となり、地域おこし協力隊の任期が最終年度となります。東伊豆町に来る前は、笹岡先生もおられるのですが、東京環境工科専門学校というところで自然について学習していました。本日はよろしくお願いいたします。

○実行委員(内山義政) 皆さん、こんにちは。内山です。私は稲取の田町区出身でして、高校卒業後、大学に進学しまして、就職して静岡県内に戻ってきましたが、2019年から職場の休業制度を使いまして、東京都立大学の大学院に通わせていただいています。草原生態系の保全を研究テーマとして研究を行ってまして、フィールドを細野高原とし、地元に通いながら調査を続けています。本日はよろしくお願いいたします。

○パネリスト(鈴木豊美) 皆さん、こんにちは。私は細野高原を管理する稲取の4つの町内会の1つ、入谷区町内会の会長で、区長を務めています鈴木です。入谷区は細野高原に隣接しておりまして、昔から関わりが深い町内会でございます。以上です。

○地域おこし協力隊(藤田 翔) それでは、東伊豆会場分科会を開会いたします。

東伊豆会場の分科会のテーマは、『利用・保全・継承』の3点となります。

まず、テーマに決めたこの3点ですが、午前中にも説明がありましたが、それぞれがローテーションしてしっかり循環していかないと、細野高原というものはなく



なってしまう。若しくは、一つがマイナスの方向へ向かってしまうと、その次へ次へとどんどんそのマイナスが引きずられ、負のスパイラルになってしまうということで、それぞれの問題を全体的に考えていけたらなという思いで、このテーマにさせていただきました。

最初に、利用について、私、藤田がお話しさせていただきます。

最初に、細野高原のこれまでの利用ということで、午前中もお話が出ていましたが、細野高原は茅場として利用されていました。茅は、茅葺きや、昔は畑を耕すために牛などを使っていたので、そういった家畜の飼料として使われていました。また、ミカン畑に敷いて防寒や、雑草が生えないようにしていたり、現在においても山菜狩りなど、多くの需要がありました。特に昔の利用に関しては、生活により密着した需要が多くありまして、現在とは異なり、少子高齢化が問題視される以前のことでしたので、担い手も十分に補充されており且つ、町民全体で利用され、さらに町全体でしっかりと保全がされていました。

そして、現在の細野高原の利用ですが、現在は生活というよりは観光やレジャー、体験というのが主な利用方法になっていると感じます。他にも、ハイキングやツーリング、少しではありますけれども、畑、山菜狩りなどもされています。

昔と現在の利用の変化を見てみると、生活必需でしたが、必需ではなくなってきたという見方ができると思います。昔の生活にどうしても密着なものというのは